

常 滑 市

黒砂ヶ丘古窯址群

南釜谷古窯址
上ヶ遺跡

常滑市文化財調査報告 第2集

1971

常滑市教育委員会

常 滑 市

毘沙クゼ古窯址群

南釜谷古窯址
上ゲ遺跡

常滑市文化財調査報告 第2集

1 9 7 1

常滑市教育委員会

序

知多半島の丘陵には、総数 3,000基をかぞえる平安時代末葉から鎌倉・室町時代にいたる古窯が存在し、その規模は日本最大といわれている。それらの古窯址群の中心が常滑市域であり、「トコナメ」という名は知多半島の古窯址群や、その古窯製品の代名詞ともされている。

ところがこのごろになり、宅地造成、農地改良など都市化の波は容赦なくおしよせ、古窯址の破壊されるもの数しれず、伝統産業を尊重して発展の道をすすもうとする当市の方策や、私ども文化財行政を担当するものにとつて、まことに遺憾とするところである。

本報告書には、当市が文化財保護審議会を設置してから、学術調査を実施した毘沙クゼ古窯址や南釜谷古窯址を中心とした発掘事業の報告を所収することにしたが、当市の誇りとする文化遺産を正しく把握し、成果を後世にのこす意図にはかならない。学術研究や文化財の保護に役立てていただければ幸いであり、諸賢のご批評をねがいたいところである。

本書の刊行にあたり、発掘にご協力いただいた各位をはじめ、研究の結果を提供していただいた執筆者諸氏に対し深く謝意を表するものである。

昭和46年4月10日

常滑市教育委員会

教育長 竹 内 七 郎

例 言

1. この報告書は、昭和45年8月7日から一週間にわたり、常滑市教育委員会の事業として学術調査を実施した^{びしゃ}毘沙クゼ第一・第二号窯の調査報告書である。
2. 知多半島の丘陵は、近時宅地造成などの土木工事をはじめとして、地形の変貌がいちじるしい。常滑市もその例をまぬがれない。位置や遺存状態などから格好の条件をそなえた古窯として調査したものである。
3. 調査の結果は、毘沙クゼ第一号窯が鎌倉時代中葉、第二号窯が鎌倉時代後葉、いずれも大形甕を生産したもので、中世古窯としては屈指の規模をそなえていた。
4. なお本書には、昭和44年3月、常滑市に文化財保護審議会が設置された最初の事業として発掘調査した^{みなみかまや}南釜谷古窯址の報告を掲載した。南釜谷古窯址は類の希れな古瀬戸系統の窯で、窯構造もすでに連房式登り窯となり、常滑窯業史の上で一時期を画したものである。
5. さらに鬼崎北小学校の屋内運動場建設にともない、製塩遺跡として知られていた上ゲ遺跡を調査したので、その報告を併載した。調査の時すでに原地形が失われており、製塩炉址を検出できなかった。東海地方の古代製塩遺跡として、遺跡の性格を紹介するにとどめた。
6. 本報告書の刊行にあたり、当市文化財保護審議会議長の八木虎雄氏から題字をうけた。
本文の原稿執筆については第三章毘沙クゼ第一号窯を磯部幸男氏、第四章毘沙クゼ第二号窯を立松宏・大下武の両氏にそれぞれ分担をうけた。他はすべて当市の文化財保護審議会委員杉崎章氏の担当である。

常 滑 市 教 育 委 員 会

目 次

第一章	毘沙クゼ古窯址群の位置と地形・地質	1
第二章	遺跡の沿革と調査の経過	4
	1. 遺跡の沿革	
	2. 調査の経過	
第三章	毘沙クゼ第一号窯	8
	1. 窯構造	
	2. 出土遺物	
	3. 小 結	
第四章	毘沙クゼ第二号窯	16
	1. 窯構造	
	2. 出土遺物	
	3. 小 結	
第五章	総 括	25
	1. 窯構造	
	2. 出土遺物	
	3. 甕の制作 —— 紐づくり ——	
付載第一	南釜谷古窯址	32
	1. 調査の経過	
	2. 窯構造	
	3. 出土遺物	
	4. 後 記	
付載第二	上ゲ遺跡	41
	1. 上ゲ遺跡と知多半島の製塩遺跡	
	2. 古代海浜集落の構造	
	3. 上ゲ遺跡の調査概要	
	4. 東海地方の製塩土器の変遷	

挿 図 目 次

第 一	毘沙クゼ古窯址ならびに南釜谷古窯址付近の地図	2
第 二	毘沙クゼ第一・第二号窯付近の地形図	4
第 三	毘沙クゼ第一号窯の窯構造	9
第 四	毘沙クゼ第一号窯の出土遺物 (1)	11
第 五	毘沙クゼ第一号窯の出土遺物 (2)	12
第 六	毘沙クゼ第一号窯の出土遺物 (3)	13
第 七	毘沙クゼ第二号窯の窯構造	17
第 八	毘沙クゼ第二号窯の出土遺物 (1)	19
第 九	毘沙クゼ第二号窯の出土遺物 (2)	20
第 十	毘沙クゼ第二号窯の出土遺物 (3)	21
第 十 一	毘沙クゼ第二号窯の出土遺物 (4)	22
第 十 二	大甕の窯詰と焼台の使用例	26
第 十 三	常滑窯製品の編年	27
第 十 四	毘沙クゼ古窯址群にみられる押印文様	30
第 十 五	南釜谷古窯址の窯構造	33
第 十 六	南釜谷古窯址の出土遺物	35
第 十 七	窯 道 具 —— 匣鉢 ——	36
第 十 八	窯道具のいろいろ	
第 十 九	東海地方製塩土器の変遷	

付 表

第 一	焼成室内に設けられた階段状の段の幅と比高およびその地点の床幅	8
第 二	甕の口径と縁帯の幅	10
第 三	焼成室各房の大きさ	34

図 版 目 次

- | | |
|-------------|-------------------------|
| 第一 毘沙クゼ第一号窯 | (上) 毘沙クゼ第一号窯の全景 |
| | (下) 毘沙クゼ第一号窯南側壁の鍛先痕 |
| 第二 毘沙クゼ第一号窯 | (上) 焼成室より分焰柱をとおして燃焼室をみる |
| | (下) 分焰柱付近の大甕による補修状況 |
| 第三 毘沙クゼ第一号窯 | (上) 焼成室後部の階段状遺構 |
| | (下) 毘沙クゼ第一号窯の出土遺物 |
| 第四 毘沙クゼ第二号窯 | (上) 毘沙クゼ第二号窯の全景 |
| | (下) 燃焼室南側壁付近にみられる支柱穴群 |
| 第五 毘沙クゼ第二号窯 | (上) 焼成室末端の支柱穴群 |
| | (中) 同上部分拡大 |
| | (下) 焼成室両側壁下端の甍片貼付状況 |
| 第六 毘沙クゼ第二号窯 | 毘沙クゼ第二号窯の出土遺物 |
| 第七 南釜谷古窯址 | (上) 発掘調査遠景 |
| | (下) 南釜谷古窯址遺構の側面観 |
| 第八 南釜谷古窯址 | (上) 隔壁にみられる狭間穴と狭間脚 |
| | (下) 南釜谷古窯址の調査状況 |
| 第九 南釜谷古窯址 | (上) 木芯を示す炭化物 |
| | (下) 南釜谷古窯址遺構の俯かん |
| 第十 南釜谷古窯址 | (上) 南釜谷古窯址全景 |
| | (下) 煙道部より焼成室をみる |
| 第十一 南釜谷古窯址 | 南釜谷古窯址の出土遺物 (1) |
| 第十二 南釜谷古窯址 | 南釜谷古窯址の出土遺物 (2) |

第一章 毘沙クゼ古窯址群の位置と地形・地質

このたび発掘調査をした^{びしゃ}毘沙クゼ古窯址の地籍は、常滑市多屋字毘沙クゼ50番地の3に区割されており、地主は名古屋市在住の二村久一氏等である。

遺跡にいたる現地の交通としては、名鉄電車常滑線の終着駅「常滑」より一区手前の多屋駅で下車する。駅から西へいけば間もなく伊勢湾の海にいたり、新しく海水浴場として開けた多屋海岸にであるのであるが、古窯址は反対の丘陵側にある。すなわち駅のすぐ東を名鉄電車とほぼ平行して走る国道247号線にでて、約300mも国道を北へのぼると小さい四叉路にであるが、ここから深く入りこんだ多屋の谷へはいる。多屋の谷は常滑市の中でも、最近もつとも人口の増加する地区の一つで、次から次へ新しい住宅がつくられている。道路の南側に新設の常滑市立鬼崎南保育園をながめ、さらに300mもすすむと、道の北側に段崖のみられる丘陵中腹に、本書にもその調査経過を報告した南釜谷古窯址がある。南釜谷古窯址は江戸初期の連房式登り窯で、常滑の窯業史の中で一時期を画するものであった。

多屋駅から1,000m、やがて道路に接した南側に陣土池と称して、この付近では比較的に規模の大きい方の溜池々畔に達する。道をさらに東へすすめば、このごろ入居を開始した愛知県住宅生協の多屋団地の北をとおつて、常滑市の前山という大野谷の奥へ通ずるのであるが、毘沙クゼ古窯址の位置は、陣土池を谷の入口とする南の支谷の谷頭部丘陵にある。陣土池は堤防の上が道となり、支谷の右側、すなわち西縁にそつて、どうにか軽四輪車の通過できる小径が通じているが、500mものぼつたころ谷頭の丘陵下に愛知用水の榊形をしたマンホールがある。ここから古窯の現地へは約70m、東の丘陵上にあるが、もう徒歩でいくしかない。

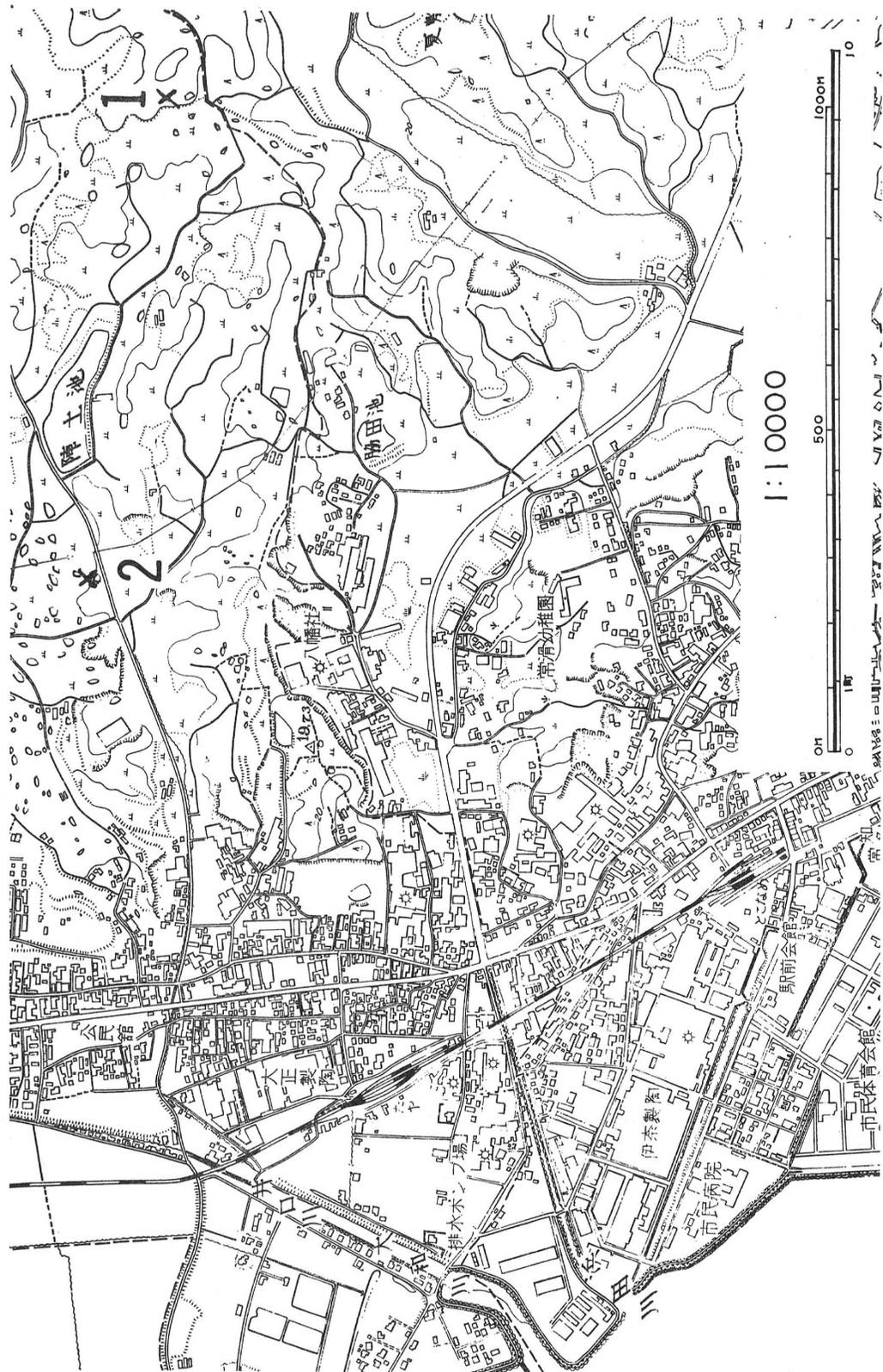
常滑市多屋地区も、ここまできると、まつたくの谷頭部であり、旧常滑の地区とも隣りあつている。車を利用する場合は、多屋駅で下車するよりも、終着駅の常滑駅で下車の方が便利である。常滑幼稚園の前をとおり、国道のバイパス環状一号線と交叉して開通した新道を利用すれば、さきにのべた愛知用水の榊形マンホールの地点から約100mの地点に駐車できる。ともあれ愛知用水のマンホール地点が、遺跡へ通ずる中継基地である。

小さい溜池の間を縫うようにして、林の中の道を約70mもいくと丘陵の頂上に到着する。丘の上から西を望見すると、伊勢湾の多屋海岸が展望でき青さが美しい。そして少し南へ目をうつすと、常滑市庁舎をはじめ市民病院などの建物を、緑の青葉の間にのぞむことができ、その間に伝統産業の繁昌を象徴するかのようには、製陶工場の林立した煙突が立っているという景観である。遺跡の丘のすぐ東の丘は、谷をへだててもう住宅生協の多屋団地である。

遺跡のある支丘は、丘の上がおおむね平坦をなしており、とくに東縁から南縁にかけて約10基の甕を中心とした古窯址が密集している。今次の調査は禿山となつている平坦面の北側に窯壁の一部があらわれている2基である。北の方から毘沙クゼ第一号窯、さらに第二号窯と名づけることにした。

常滑付近の地質は第三紀新層の鮮新世に属するものであり、この地域では常滑層群といわれ、下部は尾張地方の尾張夾炭層のつづきであり、上部はおなじく猪高礫層に比定されている。

尾張夾炭層は、粘土層や砂層が互層をなし、3~4枚の亜炭層をはさんでおり、鬼崎南保育園付近をはじめ、国道バイパスの環状一号線から毘沙クゼ古窯へくる途中の掘割には、よく発達した露頭面がみられる。猪高礫層は、うすく粗質の亜炭層をはさみ、この地域では丘陵の上部で、尾張夾炭層の上をおつた形で見とめられており、粘土層や砂層のほか礫層がまじるのが特色である。



挿図第一 毘沙クセ古窯址ならびに南釜谷古窯址付近の地図 1. 毘沙クセ古窯址 2. 南釜谷古窯址

おなじ粘土層でも、尾張夾炭層の粘土は乾燥すると粉末状にわれるが、猪高礫層のそれはかたま
る傾向がある。猪高礫層は丘陵の上部をおおっている関係から、この層はとくに侵蝕の度が大
きい。古代の終末から中世にかけて、知多半島の丘陵に窯が築かれるにあたっては、尾張夾炭層と猪
高礫層の整合面が、古窯をつくる場所として好んで利用されたものである。こうしたことが、現在
の古窯遺跡において、窯の上部すなわち焼成室後部から煙道部の構造が、侵蝕によつて流失してい
る場合の多い理由の一つであろう。知多半島に分布する古窯址に、陶器生産の原料を供給したもの
もこの粘土層にほかに、毘沙クゼ古窯址の近くにも随所に露頭をみせている。

常滑市内に多数みられる古窯址の中で、毘沙クゼ古窯址は市庁舎ならびに常滑駅より車を利用す
れば15分、周辺に多屋団地が造成されるという開発の中で、なお自然の景観をのこし、製品の種類
も大形の甕を主体とした窯であり、いうなら調査にも探訪にも格好の条件をそなえた古窯址であ
る。

第二章 遺跡の沿革と調査の経過

1. 遺跡の沿革

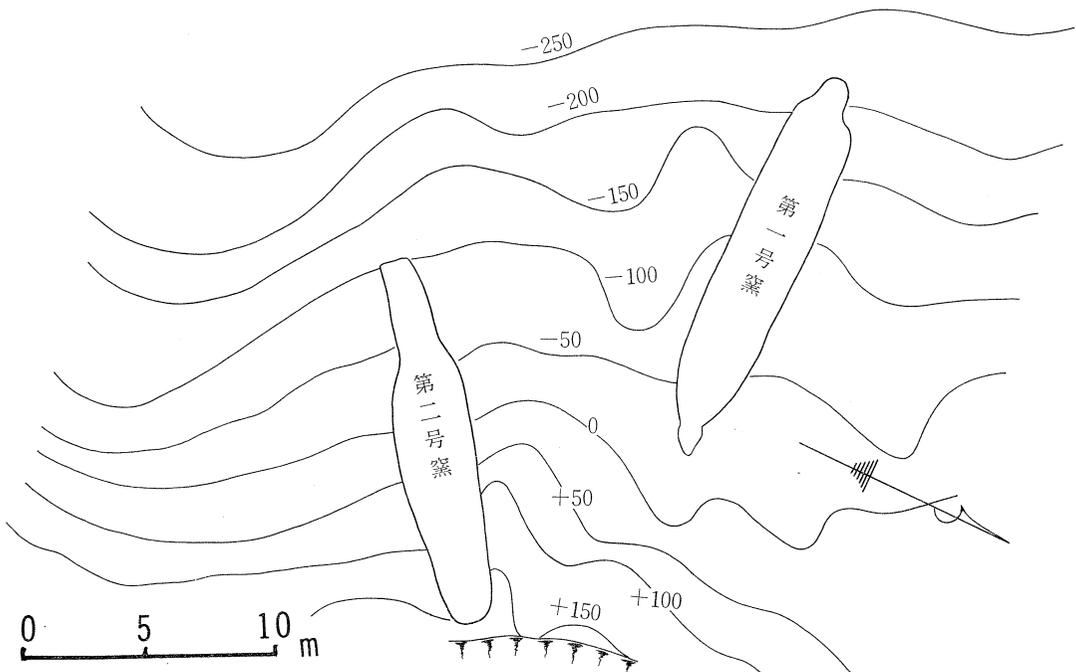
常滑市の多屋の谷と、大野谷の奥の前山をむすぶ道の左右には、古くから多くの古窯址群が知られ、多屋古窯址群と称している。

これらの古窯址は、知多半島の中央部で常滑市と半田市の境界となり、南北に長くつづく丘陵からわかれて東西にのびた支丘の先端に近く位置しているともいえるが、常滑市内の古窯の中では、海岸にもつとも近い仲間である。

毘沙クゼの支丘には、甕を中心とした古窯が約10基以上も知られ、毘沙クゼ古窯址群あるいは支群といわれる。鎌倉時代の中葉から後葉にいたるものであり、私たちが提唱する常滑地方における古窯製品の編年からいえば、第二型式から第三型式にいたるものである。

毘沙クゼ古窯址のある支丘から谷をへだてて北東の丘陵には、最近、愛知県住宅生協による多屋団地が造成され、古窯址の大部分が消滅してしまつたのであるが、東の方には御嶽山古窯址群がつづき、平安時代末葉の古式の窯が約10基みとめられ、それらは甕窯が多い。一部には山茶碗の窯もみえる。猪銅英一氏が長年の間に採集している陶片の中には、慶応義塾大学に所蔵されている国宝の秋草文壺と関連のあるススキの文様がかかれた資料もふくまれている。

知多半島に分布している古代末から中世の古窯址群は、総数を 3,000基といわれ、北は名古屋南部古窯址群と接し、東海市荒尾町の奥山や富木島町の姫島、大府市吉田付近の古窯址群にはじまり、南は南知多町の大井から内海地内まで、延々30余kmとつづいた日本最大の古窯址群である。



挿図第二 毘沙クゼ第一・第二号窯付近の地形図 (等高線比高の単位はcm)

戦後、常滑古窯調査会による活動をはじめとして、半田市・知多市・東海市などの調査事業、さらに愛知県教育委員会による愛知用水工事や知多半島道路工事に関連した調査事業により、おもむろにであるが、古窯の構造や製品の内容についても、その全貌をあらわしてきた。

こうした中で、平安時代末葉の第一型式、ならびに鎌倉時式中葉の第二型式、さらに鎌倉時代後葉から室町時代にいたる第三型式は、知多半島の古窯址群を編年する三時期であるが、そのいずれにも甕を中心として焼いた窯と、山茶碗・山皿を主として焼いた窯がある。さきにもべた知多半島各地における古窯の学術調査の結果、平安時代末葉にのぼる古式のもの、室町時代にくだる時期のものについては、発生と終末という研究の重点もあつて、比較的豊富な資料をえたものである。ところが私たちの手もとにあつめられた資料を検討すると、本来もつとも数の多いはずの第二型式すなわち鎌倉時代中葉に比定できる古窯の調査例は、すべてが山茶碗窯であり、何とかしてこの時期の甕窯を調査したいというのが、私たちがもともとめていた研究の上の課題であつた。

もともと私たちが愛知県教育委員会より委嘱されて、知多半島の古窯址群の分布を集成するにあつては、杉崎が東海・知多・大府の三市にわたる知多北部を担当し、猪飼英一氏が常滑市、立松宏氏が東浦町・阿久比町から半田市を担当し、磯部幸男氏が武豊・美浜・南知多など知多南部を担当したものである。

そうしたことで私たちが毘沙クゼの現地へ案内してくれたのは、猪飼英一氏であつた。発掘調査した毘沙クゼ第一・第二号窯から南へ30mもいつた崖面に、厚く堆積している灰原層はまさしく行基焼第二型式の甕を主としたものであつた。

表面採集の過程において、すでに良好な甕の押印文様の集成、さらに三耳壺の陶片と考えられる資料を検出し、大きな成果を期待したものである。

2. 調査の経過

昭和45年8月7日(金)曇ときどき雨

あいにくの天候であるが、本日より毘沙クゼ古窯址の調査を開始する。

常滑高校の中山善夫教諭が指導される常滑高校社会科研究会の生徒13名を主力にした第一号窯と、瑞陵高校大下武教諭が指導される名古屋市立工芸高校郷土研究部6人の生徒を中心として第二号窯を、同時に着手した。

調査員としては、第一号窯に武豊小学校教務主任の磯部幸男氏と内海中学校教諭の山下勝年氏が入り、他の森下雅彦氏(新田小学校教諭)や応援してくれた愛知教育大学生の榊原・岡田の両君、名城大学生の片山正樹君、大野町の金物店主の中村和弘氏、ほかに中村氏の友人で蟹江中学校教諭の山田氏は第二号窯の調査に加わつてもらふことにした。杉崎は総括連絡にあたる。

時おり小雨の降る日であつたが、午前中かかつてテントや道具などの搬入をおわり、午後から本格的に掘りはじめた。掘りはじめは表土をとりのぞくまでかたく難渋をきわめたが、古くからの盗掘坑が上にも下にも大きくあいているので、それらを結んで全体の構造をもとめていくことにした。

常石会館に名古屋市立工芸の高校生が合宿できるように申しこみ、場所が用意してあつたが、3日ほど名古屋からかようというので、とりあえず常滑高校生の中で遠方のもので投宿させることにした。中山先生同宿。

8月8日(土)晴

発掘の第二日目である。本日より立松宏(成岩中学校校務主任)、新海公夫(八幡小学校校務主任)、吉川允夫(亀崎小学校校務主任)の三氏が来援してくれ、いずれも第二号窯に入つてもらふ。

とくに第一号窯の方は盗掘坑がひどかつたため、調査のピッチが順調にすすみ、南の側壁の線はほとんど確実な線を検出した。今後は底の土をかきだしながら北側の壁をもとめていくわけである。

第二号窯の方は、焼成室の後部と考えられる上の方から順次に土をめぐり、床面を露出させていくのであるが、窯床の幅は意外に広い。

8月9日(日)晴

日曜のこととて参観者が多い。

これまでのメンバーのほかに午後から日本福祉大講師の福岡猛志氏や、常滑焼の修業中という猪飼青年も調査に参加された。

伝統工芸の作家として知られる江崎一生氏もきていただき、窯構造の工夫について創造的なするどい推論を提示される。

第一号窯の北壁はいまだたしかめられていない。普通の窯より五割方は幅の広い特別な例である。

第二号窯では焼成室の後半がほとんどできてきたが、両方の側壁にそつた床面に甕の陶片が貼つてある。今までに知られていなかった問題である。

猪飼英一氏より連絡あり。宿痾の足痛が悪化して参加できない由、現地を訪れる人は誰しも猪飼氏の不在をいぶかしがるが、新聞の報道をたよりに発掘の成功をいのつてくれる氏の友情に謝す。

8月10日(月)晴

名古屋市工芸高校OBで春日井市役所に勤務している木田文夫君や、県立緑が丘商業高校の野中教諭が生徒1名とともに新しく参加してくれた。常滑市陶芸研究所員の竹内公明氏もわずかの暇をもとめて応援してくれる。

第一号窯の窯も床面はまだまだであるが、焼成室や燃焼室の両壁や分煙柱の位置が明らかになってきた。南側の焼成室の窯壁には鉄による整形痕がとくによくみえる。焼成室の後半には階段状の遺構がみえるが、須恵器の窯などでは一般的なことであるものの、中世の古窯では特色の一つである。窯内から一括遺物が採集されるが、発掘の前に想像していた鎌倉中期に比定される行基焼第二型式よりも新しく、鎌倉時代後葉にあたる第三型式にくだるものようである。

第二号窯の分焰柱は折れている。

燃焼室の天井部をつくる時の支柱をさしたと考えられる柱穴が南壁より幾本も発見された。第二号窯の編年は第二型式にまちがいなく、鎌倉時代中葉のものである。

常滑市教育委員長の杉江俊三氏、教育長の竹内七郎氏の案内で、NHKの制作部が特別番組の取材にくる。

江崎一生氏の紹介で、東京の女子大生の守屋淑子さんも発掘に参加される。

8月11日(火)晴

第一号窯焼成室の上端につづく煙道部は流れてしまつたものと考えていたが、約1.5m水平にのびている焼土面を発見した。また分焰柱の基部には大形の甕を縦位に割つて補強しており、柱の背後にも小形の甕が2個あてがわれていた。さらに分焰柱と北壁との間の通焰孔天井が遺存していると考えていたが、実際は崩れおちた窯壁であつて、分焰柱は約1mほどしか残っていないことがわかつてきた。

第二号窯の後部は切れている。しかし焼成室の後端部と考えられる場所に特色のある施設がのこつていた。木を芯にしてスサをまじえた粘土棒を横にならべ、ダンバーの代用といった効果をねらつたものであろう。

第一号・第二号とも全長約17mという、いまだ例を知らない大規模のもので、窯構造の細部に間

題点を提供している。

愛知県教育委員会文化係の柴垣勇夫主事の視察をうける。

8月12日（水）晴のち曇

作業を開始して間もなく、常滑市長久田慶三氏が視察され、一同を激励して下さった。両窯とも午前中でほとんど発掘を終了。一斉に測図にかかる。

（杉崎 章）

第三章 毘沙クゼ第一号窯

1. 窯 構 造

本窯は焚口から煙出しにいたるまで、その床面全体を遺存していた。窯の全長は16.5mである。

床面の傾斜は、焚口から燃焼室にかけて僅かな角度をもつてのぼりはじめ、焼成室にはいる分焰柱の両側で約19度と急に角度を増している。焼成室前部では約13度と一たん傾斜をゆるめ、中央部から後部へかけて再び19度内外の傾斜角をもつてのぼっている。なお焼成部の中央部から後部へかけては階段状に段を7段つくっている。第7段目から煙道へ32度と急傾斜をなしてのぼり、煙道になると再びゆるくなつて煙出しに達するようである。煙道から煙出しにかけては、熱を受けて灰白色になつた床面下の土層と考えられる面が現地表面に露出していて、その形状を知ることはできたが、床面傾斜を測定することはできなかった。

床面の幅は、焚口で1m、分焰柱の中央で1.8m、分焰柱から4mのぼつたあたりが最も広く3.4mを測る。そして階段状に段の設けられたあたりから次第に狭まり、第6段から7段、煙道へとしばらく煙出しへはいるところでは90cmとなる。煙出しは袋状につくられている。

燃焼室は焚口から分焰柱にいたる長さ約2.4mの部分であつて、床面は3度内外ののぼり傾斜をもっている。床幅は焚口で1m、奥へいくにしたがつて開き分焰柱の手前で1.6mとなつている。両側壁は焚口のあたり約70cmの間は赤褐色を呈し、それより奥はよく焼けしまり青緑色となつている。床面には炭や灰が5cm内外の厚さで堆積していた。

焼成室と燃焼室の境界には分焰柱があり燃焼・焼成両室を区別している。ここはまた床面傾斜も角度をまし、床幅もラツパ状に開くところにあたる。

焼成室の横断面をみると、その床面は測定した5つの計測点のいずれでも平坦な面をなしている。床面に続く側壁は、焼成室後部では一たん外方へ開きながら立ち上がり内彎するようであり、中央部の床幅が最も広がるあたりでは直ちに内彎している。そして前壁の側焼はほぼ直角に立ち上がったあと内彎している。燃焼室との境をなす分焰柱中央の横断面をみると、平坦な床面に対して側壁は外方へ開いたあと内彎している。

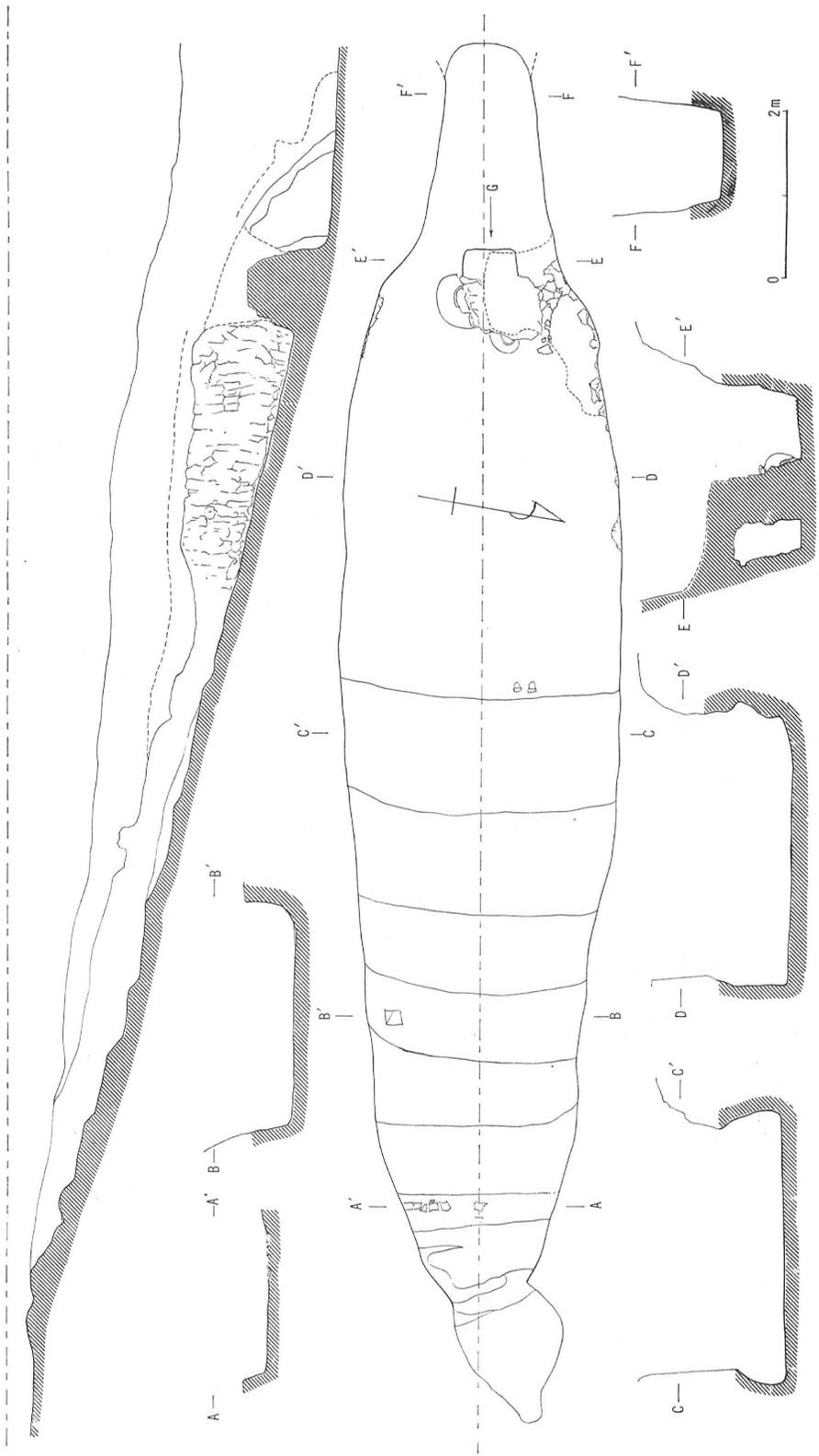
側壁には整形の際の鎌のあとが明瞭に残されている。また、焼成部前部の側壁には補修のあとがみられる。

しかしこの窯で注目されるのは、焼成部中央部から後部へかけての床面の施設である。すなわち、分焰柱より5mのところからはじまる階段状の7つの段である。床の幅と前段との比高の数値は付表第1の通りである。段は窯の中軸線に対してほぼ直角方向に、不整形ではあるが弧を描いて設けられている。各段の幅は、焼成部の後部になるにしたがつて狭ばまり、第7段は中央部で40cmである。そして段の比高は、同一の段でも地点によつて異なるが10~20cmである。また段の上面に

付表第1 焼成室内に設けられた階段状の段の幅と比高およびその地点の床幅

段	1	2	3	4	5	6	7
段の幅	1.3~1.4	1.1~1.3	0.8~0.9	0.8~0.9	0.6~0.9	0.8~0.9	0.3~0.6
前段との高比	0.1	0.1	0.16	0.14	0.16	0.1	0.18
床幅	3.2~3.4	2.9~3.2	2.6~2.9	2.5~2.6	2.4~2.5	1.9~2.4	1.6~1.9

(単位 m)



挿図第三 毘沙クゼ第一号窯の窯構造

は第7段にみられるように、甕の破片を並べ敷いたところもある。

分焰柱は焚口から2mの地点にあり、北壁から34cm、南壁から74cmと北に寄つて立てられている。基部の平面プランは縦110cm横72cmの長方形をなしている。また基部は二つ割りにした甕の破片がはりつけられていた。

この窯の焼成部の床面積は概算で約30㎡である。

第7段めから急角度をなしてのぼる焼成室の最奥部で傾斜角が折れるように変わる。これはまた床幅が90cmにしぼられるところでもあり、ここが焼成部と煙道との境界である。煙道から煙出しにかけての部分は、窯の中軸線に対して、約20度北へ方向をかえ長さ約1.6m、最大幅1.2mの袋状をなし、煙出しにあたる部分の径は約30cmである。

2. 出土遺物

窯は天井が落ち込み、そのくぼみには黄褐色の土砂が堆積していた。この堆積層の中にも甕の破片など少量の遺物がみとめられたが、それらはこの窯の周辺に散布していた土器片とともに、丘陵頂部に密集する他の古窯の製品であり別に採集して保管することにした。

本窯の遺物は、赤褐色に焼けた天井焼壁と床面との間に含まれていたもので、山茶碗、甕、壺の3種類である。

山茶碗（挿図第六の8～11）いずれも焼成室中央部で甕の土器片にまじつて検出されたもので、4個体分である。うち底部のみの2例には、ひしやげて低くなつてはいるが粗穀痕のついた高台が付されている。ほかの2例は器高4cm口径13cm、底部の径7cmとやや小形な作りで高台をもたない

甕は焼成室の前部、分焰柱の近くに寄せ集められたといった状態で出土した。これらには口縁部の作りや器形による差異が認められるが、ここでは口径45cm以上の大形のもの、25cm前後の小形なもの、35cm前後の中形のものにわけて述べることにする。

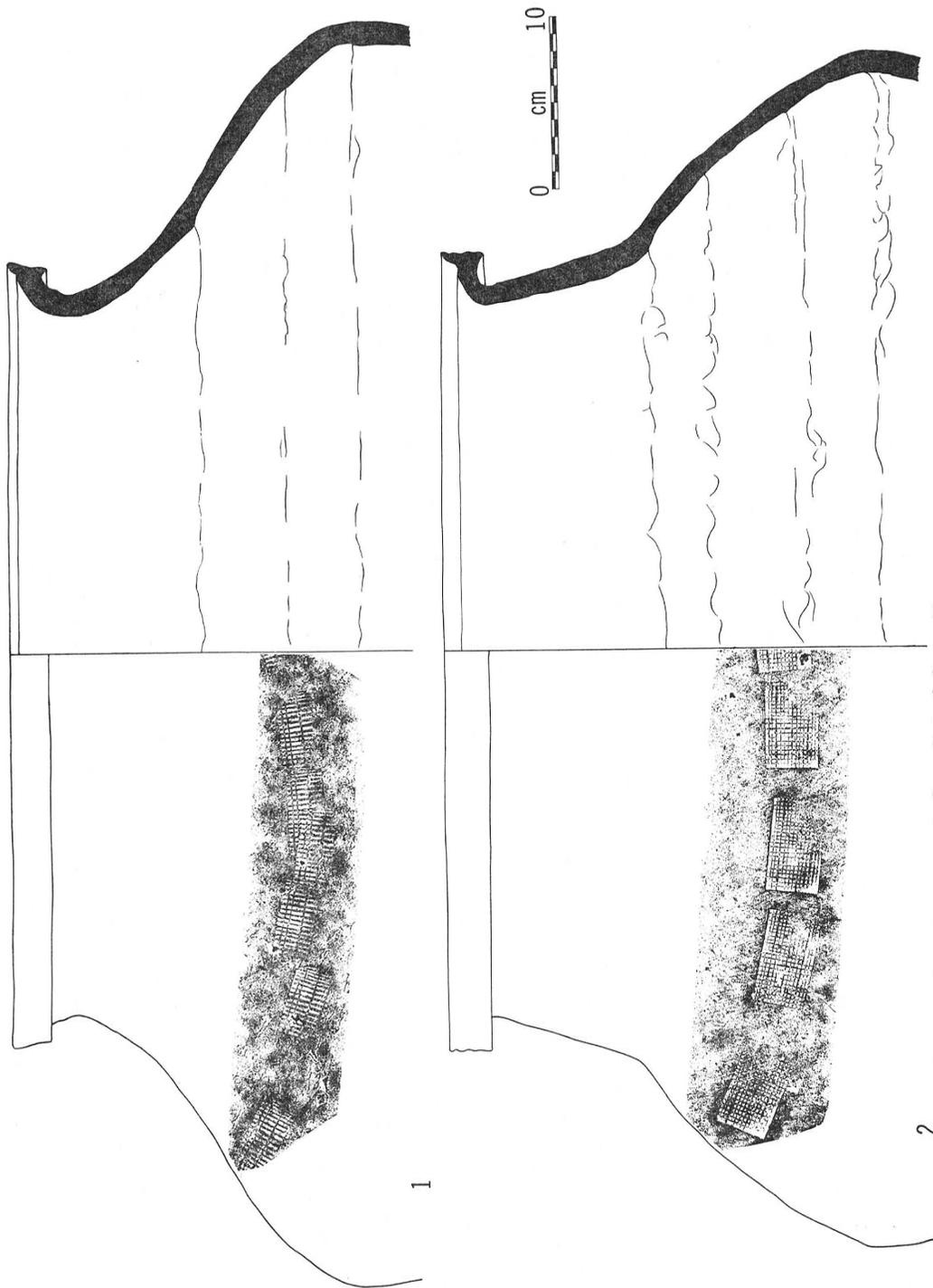
大形の甕（挿図第四の1,2 第五の5）には、外反した口縁の口端を外方からおさえて幅2.5cm前後の縁帯を作りだし、短い頸部から肩の張つた胴部へとうつる器形のもの、同じような器形をもちながら口端を引き上げたあと折り返して、外方から整形して断面がN字状になる口縁をもつものがある。前者には肩に格子目の押印文がめぐらされている。どちらも口縁から肩部までの資料であるが、甕の最大径は肩部にあり、その径が70cmをこすものもある。

中形の甕（挿図第五の1～4,6）口縁部から胴部、底部へとつづく資料が得られなかつたので全体の器形は詳らかでないが、いずれも短い頸部から肩の張つた肩部へとうつるものである。口縁には、外反する口縁の口端を外方からおさえて幅2cmほどの縁帯を作つたものと、断面がN字状になるものがある。後者には縁帯の幅が3cmのものから3.9cmのものまでである。

小形の甕（挿図第五の7,第六の1～4）には、口径22.5cmのものから26.5cmのものまでを入れた。外反した口縁部の口端を外方斜め上からおさえたものや、ま横からおさえているもの、口端部を引き上げ直行させているものなどがある。いずれも1.5～2.0cmの縁帯を作りだしている。挿図第六の3にみられるように、口縁を折り返しその断面がN字状をなすものもみとめられた。小形の甕は、短い頸部からなだらかな肩部へうつるといった器形で、大形、中形の甕にみ

付表第二 甕の口径と縁帯の幅

番号	口径 (cm)	縁帯の幅 (cm)
挿図四		
1	45.0	2.4
2	46.0	2.5
挿図五		
1	39.0	1.9
2	35.0	3.0
3	39.0	3.8
4	39.0	3.9
5	46.0	4.5
6	37.0	2.0
7	23.0	2.1
挿図六		
1	25.0	1.5
2	22.5	1.2
3	26.4	2.5
4	24.0	1.4



2 挿図第四 毘沙ヶゼ第一号窯の出土遺物 (1)



挿図第五 毘沙ヶ澤第一号窯の出土遺物 (2)



插图第六 毘沙クゼ第一号窯の出土遺物 (3)

られた肩の張りがやわらかくなっている。とくに挿図第六の2のように、肩部がなだらかになるものもある。

ほかに、肩部のみの出土であるが、3条の沈線をめぐらし、部分的に頸部から第2線にかけて左傾、右傾の斜めの沈線をを引き、斜格子状の文様を構成している土器が1例ある。

壺(挿図第六の5~7)の資料は4個体分で、焼成室の分焰柱近くから出土したものである。1例は短頸壺で、口端はほぼ水平に切つて仕上げている。やや内向する柱部の高さは4.5cmで、くの字状に折れ曲つて肩部につづいている。口径は22cmである。口縁部から肩部にかけての資料1片のみであり、器形の全容を知ることはできない。

ほかに、口径19cm、外反する口縁の口端を外方からおさえて作りだした縁帯をもち、径15cm高さ7.5cmの円筒形の頸部が急角度をなして肩部へうつる器形のもの(挿図第六の5)、同じ器形で口径が21cmとやや大きくなるものなどが3例ある。いずれも頸部に3個の耳をもつ三耳壺である。焼成の途中で焼け崩れているが、三つの耳をつなぐように頸部に篋状施文具による鋭い沈線を1条めぐらしたものもある。

3. 小 結

第一号窯は中軸線をほぼ東西にとり、丘陵の頂部にその斜面を利用して築かれた窖窯である。天井にあたる部分は崩れ落ちていたが、焚口から焼成室後部にいたるまで地下に埋まり、床面や側壁は良好な状態で遺存していた。煙道、煙出しは現地表面に露呈し火焰による熱を受けた土層が地山との境界をくつきりとつけその形状を知ることができた。

窯は焚口から煙出しまで全長16.5m、床面の最大幅は3.4mを測るこの地方きつての大規模な窖窯である。窯内で焼かれた製品は山茶碗・壺・甕の三種類であるが、その中心をなすのは甕である。

窯の構造をその床面傾斜から検討してみると、燃燒室は焚口からわずかなのぼり傾斜をもつて分焰柱の前面にいたり、ここで角度を増して焼成室につづいている。焼成室にはいと一旦傾斜をゆるめて中央部にむかい、階段状に段を造りだしたあたりから再び角度を増し、最奥部は急角度にして煙道へつないでいる。煙道は緩傾斜となり煙出しに達するようである。

本窯は知多半島古窯の甕窯にみられるように、甕の腰に直接火焰があたり焼成前に焼け崩れるのを防ぐため、燃燒室から焼成室へうつる床面を段をなして下降させる甕窯様式の範ちゅうに入らず、むしろ山茶碗など小形品を焼成するため、火焰が床面をほうように構築された山茶碗様式に近似している。ただ形の上で山茶碗窯、甕窯といわれるものの、現実には山茶碗様式の床面傾斜をもつ窯で割合に大形品を焼いている知多町旭大池第一号窯のような例もある。この場合は分焰柱の両側に間仕切障壁を高くきずいたり、製品を窯詰めする際大形品の前に壺や片口鉢などのような中形品を配置して、火焰が大形品の下胴部に直接あたるのを防ぐなどの措置がとられている。(註1)

この窯では他の例にみられるような間仕切障壁はその痕跡もとどめなかつたが、ただ分焰柱基部に器高50cm前後の中形の甕が縦位に割つてはりつけてあつた。横に張り出して、分焰柱の補修とも考えることができるが、むしろ窯詰めの終つたあと側壁まで破片を芯に立て並べて焼壁としたことも考えられる。また、検出し測図できた製品をみると、口径45cm、最大腹径70cm以上の大形の甕3例に対して、中小形の製品は壺も入れると14例を数える。このことは窯詰めにあつて、大形品の前に中小品を置き、大形品の下胴部に火焰のあたるのをカバーする配置の方法をとつたことを示すものであろう。

窯構造におけるいまひとつの特色は、焼成室中央部から後部へかけて階段状に造られた段であ

る。さきに東浦町大原古窯では焼成室末端で煙道部へ移るところに棚状の段がもうけられていたこと。また巽が丘第一号窯では急傾斜をなす焼成室後部の床面下に両側壁間にわたる棚状の掘りこみが検出されたことが報告されている。前者は知多市大知山第一・第三号窯の焼成室後部に中軸線にそつてみられた径20cm前後の凹みと同じく窯内作業のための足場と考えられ、後者は築窯段階における作業の足場と考えられている。(註2)本窯にもうけられた段は、第7段にもみられるように段の上面を土器片を敷き並べて整えていることなどから築窯段階の足場としてではなく、大規模な窯における製品配置や焼成の効率を高める手だてと窯内作業を容易にするための意味とを兼ねそなえた施設と考えたい。

なお段のない焼成室前部では、焼台を2個組み合わせて使用している例もみられた。出土した遺物のうち甕には大小の差異があるが、外反した口縁の口端を引き上げたり、外方からおさえたり、折り返して断面がN字状になるようにしたりしていて手法にも差異がみられる。ただいずれも口縁に縁帯をもつということでは同様である。壺は3例とも中形の三耳壺であった。山茶碗には高台を付したものとないものがある。遺物は全体として東海地方における行基焼第三型式に編年できるものである。第一号窯は鎌倉時代後葉から室町時代初期に甕を中心にした生産をするために築かれたものであろう。

註 1, 2 半田市誌資料編Ⅱ所収「半田市内の知多窯」1969年 半田市誌編さん委員会
「大知山、旭大池古窯跡」1970年 東海古文化研究会

(磯部幸男)

第四章 毘沙クゼ第二号窯

1. 窯 構 造

本窯は、丘陵頂上近くの斜面に築かれた窖窯である。焚口は真南より約52度ほど西に偏して開口しており、本窯よりやや下位に位置する第1号窯とほぼ同規模の大形窯である。表土の流出が激しく、天井部はすべて崩壊して、窯内を土砂が埋め尽くす状態であつた。窯の全長は、焚口から煙道部の一部を含めて約15m余を計測し、中央部での胴膨れは右壁側が勝つて、全体の形にやや歪みを与えている。

(1) 焚口付近および燃焼室

分焰柱より焚口末端までの長さ約3mの部分が、燃焼室である。両壁は巾1.3mで、ほぼ平行的である。床面傾斜は、分焰柱より1.4mの辺りまでまだゆるく下がるが、それ以降、焚口にかけて水平化する。床上には、全体にわたつて5cmほど灰の堆積が見られ、床自体の焼けもかなり良好といえる。なお、今回の調査で、焚口付近施設の好資料が得られたので、触れておきたい。すなわち、分焰柱よりやや手前の右壁沿いに、細い支柱列の遺構が発見されたことである。確認されたのは計7個で、いずれも直径4~5cmが計測されている。差し込みの角度は必ずしも垂直でなく、幾分、内、外傾するものがある。内側に僅かながら炭化物の付着を見るが、炭化木芯は発見されず、恐らくは竹を使用したことと想像される。またそのならばは千鳥状であつて、砂質地山の側面から30~40cm程内側に位置しており、スサ入り粘土が、その支柱を塗り込めている格好であつた。

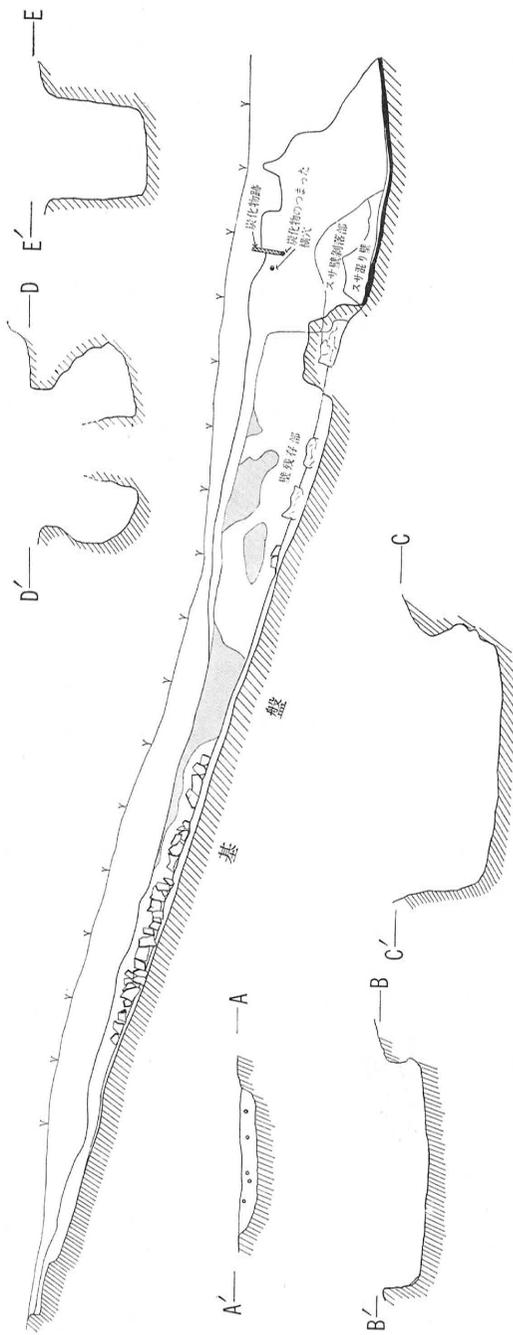
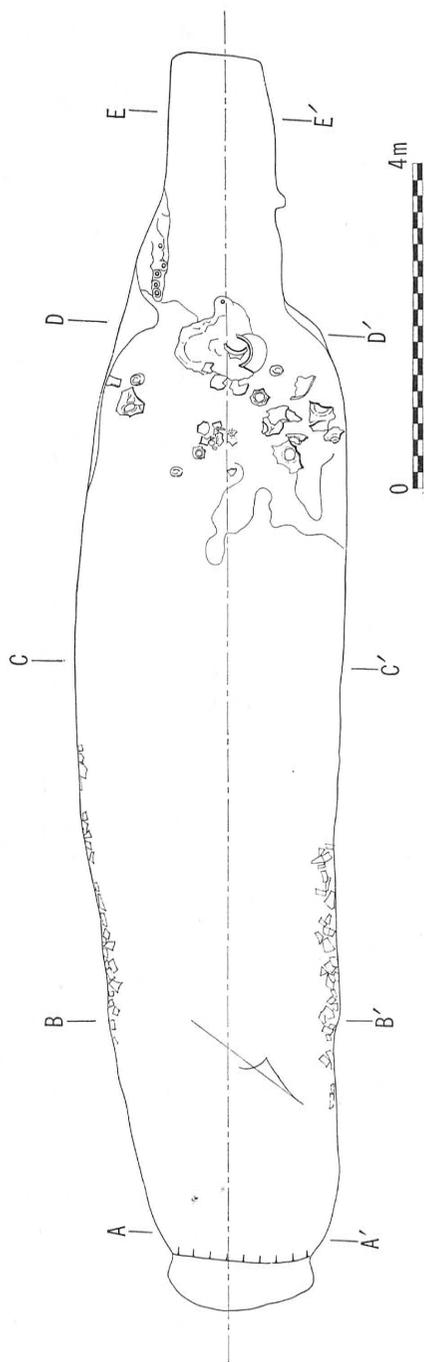
築窯の過程において、燃焼室の天井がどの段階で、どのような方法でかけわたされたものであるか、久しく問題とされていたが、解決の示唆を与えるものであつた。なお、この点を裏付けるものとして、分焰柱付近の僅かな天井残存部において、スサの混じる部分と、砂質粘土の地山がそのまま焼け締まつた部分との明瞭な区別が見られた。つまり、ほぼ分焰柱を境として、燃焼室部は、毎回の焼成毎に、新たに作り直された事を物語っている。一方、左壁側においては、同様の遺構が見られないが、スサをまじえたはりつけ壁の末端が、ほぼ右壁支柱列末端に対応する点から考え、最終密閉施設の位置を確認し得ると思う。

(2) 分 焰 柱

平面としてはほぼ80cm×80cmの規模であるが、補修の跡が著しく、正確には計測し得なかつた。築窯時においては、地山を掘り残して利用したのかも知れない。補修のうちに甕を埋め込んでおり、それをスサ入り粘土が巻く状態であつた。燃焼室に近い側のほぼ中央に、炭化木芯の跡が見られるがやはり分焰柱修復時のものであろう。

(3) 焼 成 室

分焰柱より煙道部までの部分で、長さ約10mを計測する。左壁側に比し右壁の膨らみが大きくなつている。中央部での床面傾斜は約18度であり、分焰柱にいたるまで、その傾きは殆んど変わらない。本窯の場合、注目すべきは、両壁沿いに甕片を貼り付けた状態が見られることで、はつきり壁内に塗り込められたものもあるが、大部分は単に貼り付けたという感じである。床面、壁共補修の形跡があり、塗り込め甕片の場合はその補修用途を考えて良いだろうが、他の多くはむしろ断熱の役割りとすべきである。15mに及ぶ大形窯であり、地山を伝つて逃げる熱の大きさを想えば、当然この様な工夫は為されてよいだろう。壁の状況は、下降するほど、良く焼けしまり、釉の美しくかつた部分もある。しかし上部では、殆んど貼り付けた粘土(スサをまじえない)も剝落し、砂質地山が赤く焼けた肌を見せるのみであつた。



挿図第七 昆沙クゼ第二号窯の窯構造

(4) 煙道・煙出し

窯幅がせばまつて焼成室も末端となると、傾斜がなくなり、約200cmの幅で100cm水平に奥へ延び、やがて垂直に立ちあがるのであるが、垂直壁は約15cmが残存するのみで、それより上部は流失してしまっており、明らかにすることはできなかつた。この水平面は火あそびともみられる部分であつた。水平面の奥に立ちあがつた垂直壁の中程に、直径約5cmの柱穴が斜状にあげられ、芯となつた柱を、スサ入りの壁土様の粘土で巻いた痕跡が5個ならんで認められた。煙道・煙出し部構築の際に設けられた遺構と考えられるものである。

2. 出土遺物

鼠沙クゼ第二号窯からの出土遺物は、巨大な窯にふさわしく、すべてが大形甕、中形甕、大形壺で、知多半島古窯固有のいわゆる三筋壺の類の中形壺は全く検出されなかつた。また山茶碗も小破片が3片出土したのみで、計測もできなかつたし、本窯の焼成にかかるものであるかどうかとも判断し兼ねた。窯内から多量の土器片が出土したが、火力がかかり過ぎ、いわゆる焼けつぶれの状態のものが多く、計測できたものは12個体にすぎなかつた。

(1) 大形壺

太い頸部がなだらかにひろがつて肩部へと移行し、その区別は明確でなく、上胴部で最も幅がひろがる。直上した頸部は口辺部にいたつてほぼ直角に外反し、口縁端面は下端をやや内側に傾斜させて面取りが施され、断面が逆三角形を呈する。4個体出土したがいずれも口径が20cm前後、最大胴径が35～40cm、高さ40～45cmと推定される大形壺である。(挿図八の1～4)

頸部から肩部に移行するあたりに耳が3個付され、いわゆる三耳壺の形態をもつのである。中央に縦位の貫通孔をもつのが本来であろうが、孔はなく装飾的なものである。(挿図八の1～2)

また、頸部に窯印様の鋭い窠がきをもつもの(挿図八の3)もあるが、内部を観察すると、輪積み手法によつて作られた痕跡がきわめて明瞭であることもその特色の一つといえよう。特に頸部と肩部の圧着面の内側にははがれの生じたものが多い。これは底部から胴部、肩部へと輪積み手法によつて作られたものに、ロクロによつて引いた頸部、口辺部を最後に圧着したものである。頸部から肩部にかけてのなだらかさや口頸の太さは、それらの作業を容易ならしめたであろう。

中には頸部と口辺部の間に外側から帯状に粘土を盛りあげて補修した例もみられる。(挿図八の2) これらの壺には印花文はみられない。

(2) 大形甕・中形甕

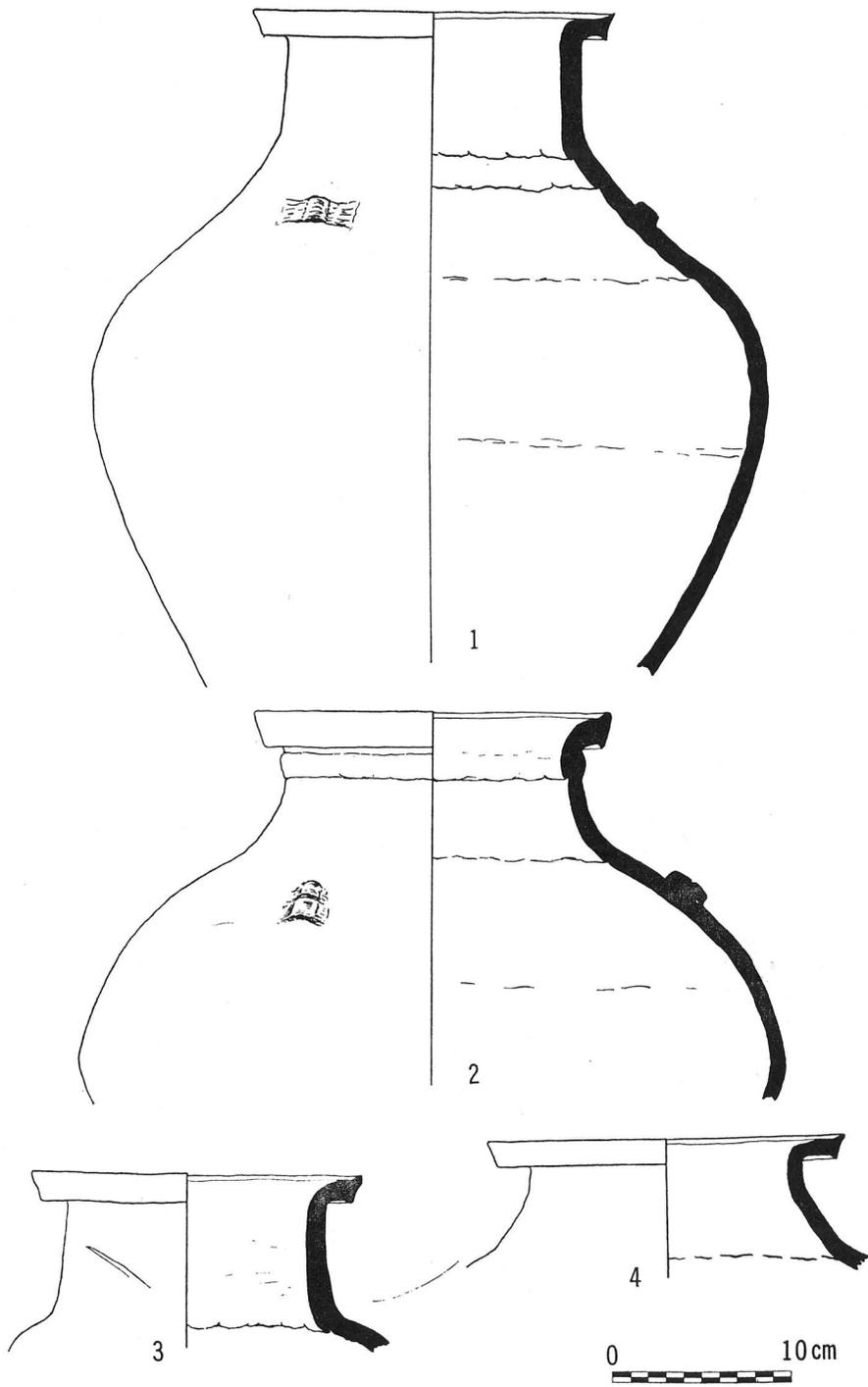
口径が55cmあり、最大胴径、高さともに80cmを推定させる大形甕である。口辺部の手法は前述の大形壺と同じく端面を逆三角形に仕上げている、内面には輪積み手法の痕跡を明瞭に残している。(挿図九の5)

また、口径35cm内外、最大胴径50cm、高さおよそ50cmを推定させる中形の甕が2個体あり、肩部に格子状の印花文を廻らしている。口辺部の作りは大形甕と同様であるが、頸部と上胴部の接着面にひび割れを生じ、突帯状に粘土を貼りつけて補修したものもみられる。(挿図九の6)

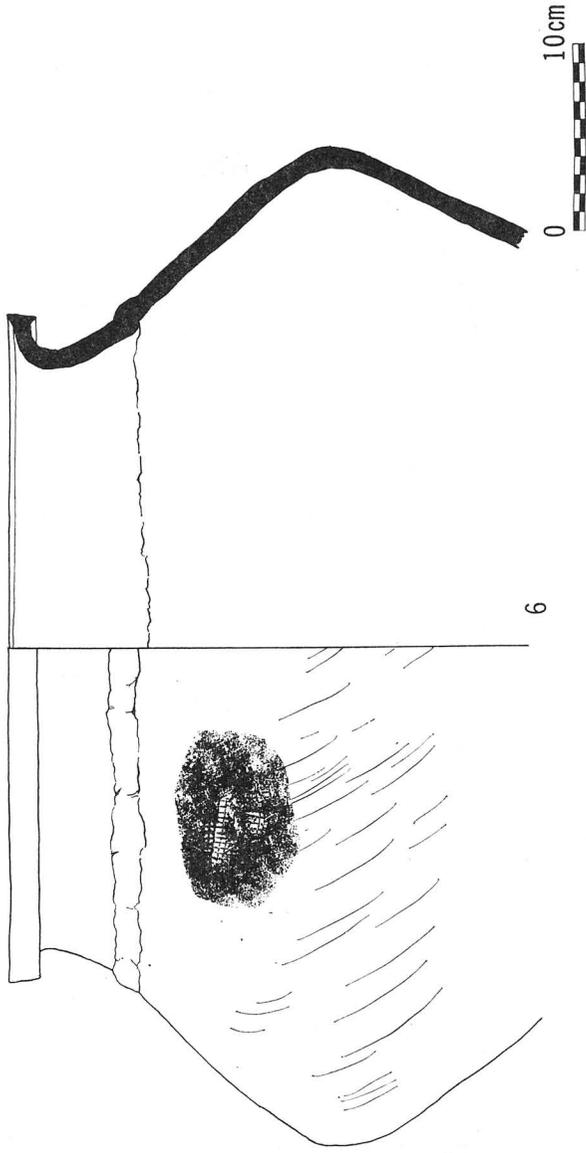
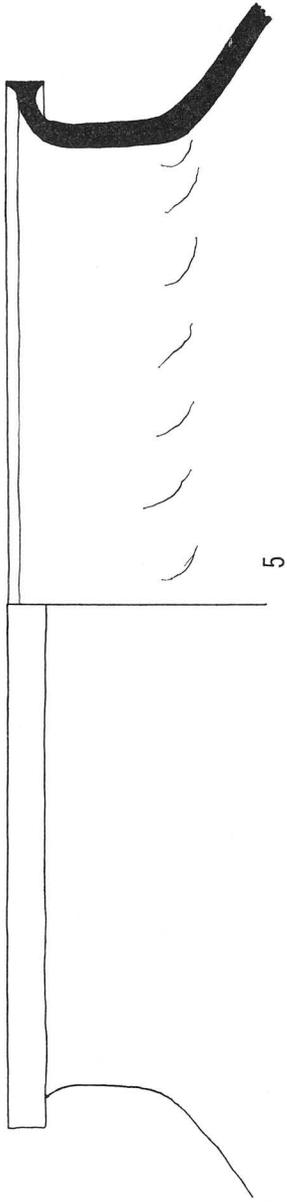
(3) 小形甕

口径20cm内外、最大胴径、高さとも25cm内外を推定する小形甕で、口辺部の製作手法は大形甕、中形甕と同一であるが、大形、中形甕が、上胴部に最も張りが強く、下胴部に行くに従つて細るのに対して、小形甕は中胴部に最も張りが強く、全体に球形に近い提灯形をなす。強い張りをもつた中胴部に格子状印花文列を配した例もみられる。(挿図十一の11)

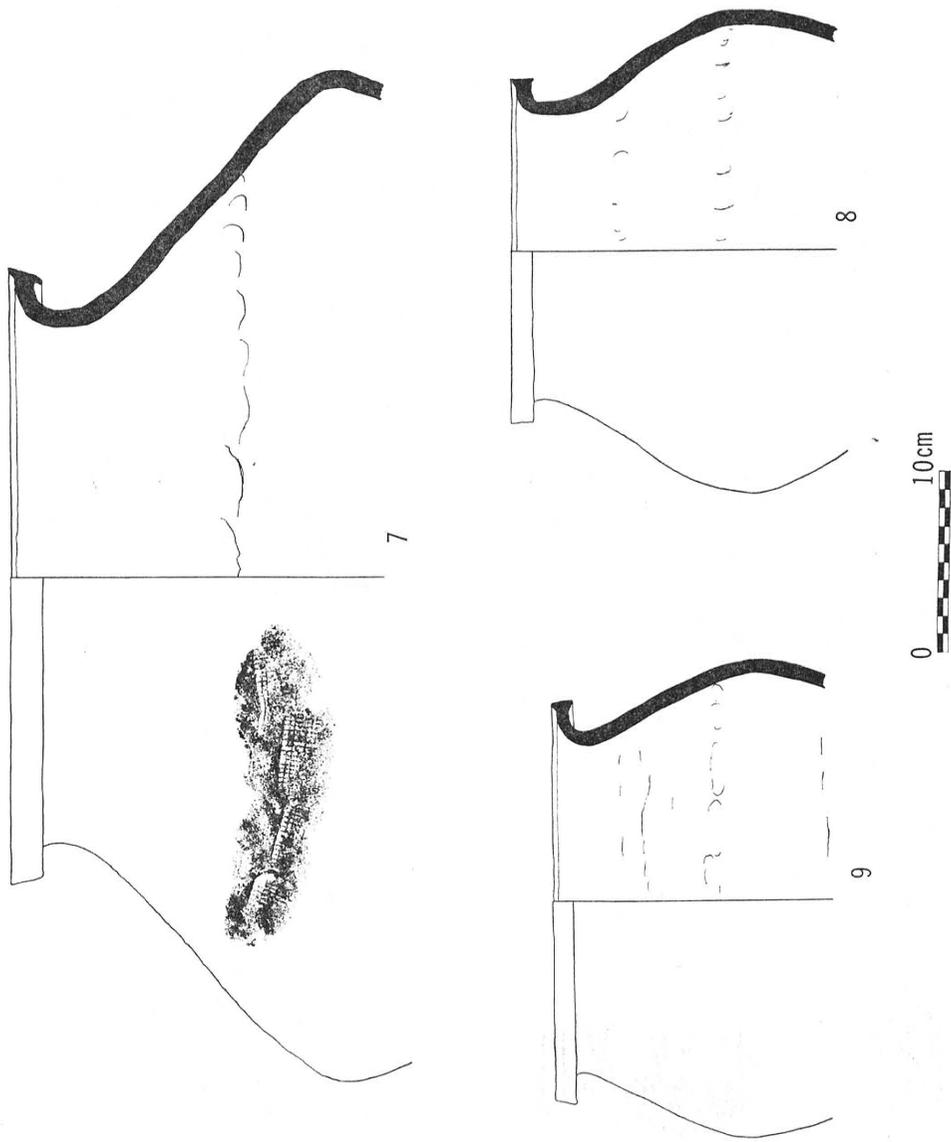
壺、甕とも還元焰で焼成され、冷却段階において酸化を来しているため、肌は赤茶色を呈している。



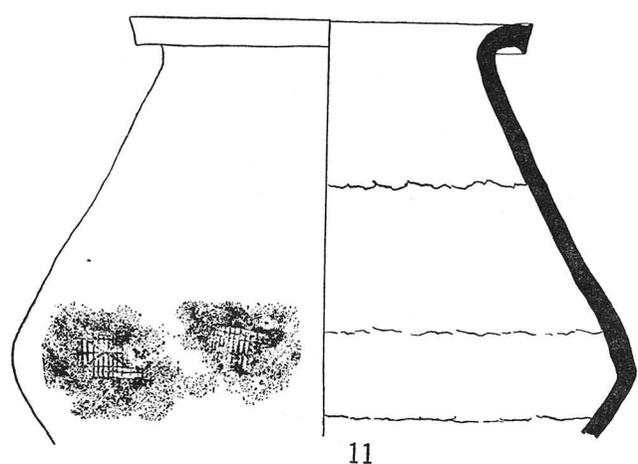
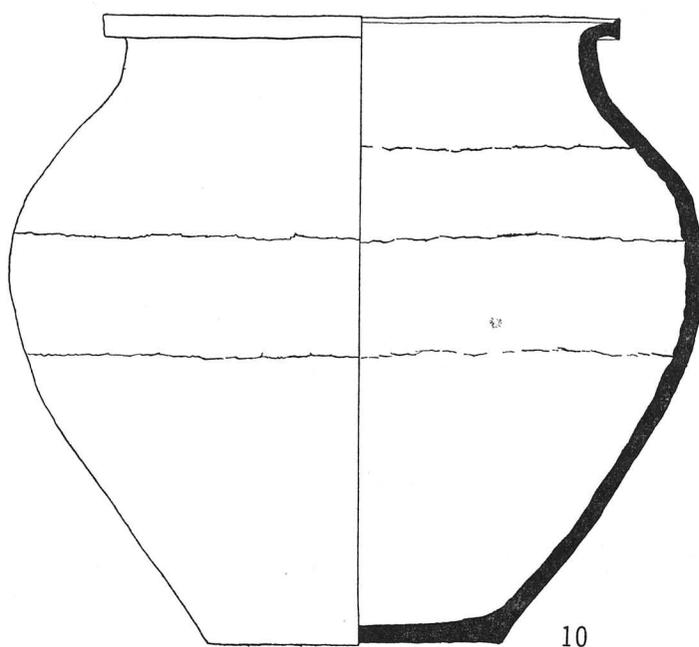
挿図第八 昆沙クゼ第二号窯の出土遺物 (1)



挿図第九 毘沙ヶせ第二号窯の出土遺物 (2)



插图第十 毘沙ヶせ第二号窯の出土遺物 (3)



挿図第十一 昆沙クゼ第二号窯の出土遺物 (4)

3. 小 結

毘沙クゼ第2号窯は最大窯幅3.3m、全長15mを越える知多半島古窯址群屈指の大窯であることは、窯構造のところでも述べた通りであるが、窯構造の面から一、二の問題点があるので指摘しておきたい。

もともと窖窯を築窯する際は、適当な傾斜地と微粘土混りの砂質層が選定されるのであるが、それは1300度にも及ぶ高熱が窯内全体にかかった場合、木節系統の知多半島の粘土では高熱に耐えられず、へたりの生ずることが多く、従つて耐火力のある砂層を選定するということと、もう一つは、構築の場合、分焰柱を掘り残し、焼成室をトンネル状に掘りすすみ、地表面をそのまま天井部とするため、砂質層は掘り抜き易い利点があつた。しかし、この利点は破損し易いという欠点にもつながるわけで、特に煙出しや焚口のような末端は当然破損が考えられるわけである。また大形の甕などを出し入れする際にも、その出入口はある程度の大きさは必要であつたであろう。しかし窯の焚口は還元焰焼成の場合、焼成完了の直前のある時点において空気を遮断する必要があるため、あまり大きくするわけにはいかない。従つて、焚口は焼成の都度作り直していたことが予想されていたのであるが、本窯でその痕跡が認められたのは収穫であつたといえよう。

すなわち、分焰柱より手前の燃焼室、焚口付近の両壁の中段から直径約5cm前後の七個より成る柱穴群が検出され、柱穴内に炭化物の充填が一部には認められた。両側に穿たれた柱穴は千鳥状となつて左右相對せず、必ずしも整然としたものではない。しかし、掘り込まれた方向から復原すると、焚口および燃焼室の天井をドーム形にしつらえるため芯としたことが、分焰柱付近のスサ混じりの粘土部分とともに十分にうかがえるのである。すなわち、焼成すべく整形された半製品を窯内に搬入した後に両壁の中段に弓状または叉状に芯をさし、それをもとにスサ混じりの粘土で覆いながら天井を構築していつたものと推察され、その部分は製品搬出の際には取りこわしたものであろう。

同様のことが煙道部から煙出しにかけても検出された。すなわち、焼成室上部の末端がやや水平になつた火あそびと考えられる部分の最奥の、窯の中軸線に直角でしかも垂直に立ちあがつた壁が認められ、その壁に焚き口と同様の遺構が認められたのである。直径約5cmの柱穴は壁の全体にわたつて等間隔ではないがほぼ一列に並んで5個斜めにあけられ、スサを混じた壁土状の粘土で柱を巻きつけた痕跡も明瞭であつた。これは、すでに穿たれた穴へスサ入りの粘土を巻きつけた直径約5cmの竹状の柱を入れ、それを芯にして煙道・煙出しあるいは火あそびと考えられる部分の天井を構築したものと推定されるのである。当然その柱の末端は掘り残された地山でしかも焼成室の天井部を構成している部分へと連なつたであろう。前述のごとく砂質層で侵蝕を受け易いため、煙出し部の構造を明らかにすることができなかつたのは残念であるが、煙道・煙出し部とも焼成の都度、構築された例証として提示したい。焼成のたびに煙道・煙出し部を構築し直したということは、その部分の脆弱性もさることながら、焼成室上端付近の製品（比較的の小物であろう）の出し入れと、窯内作業の明りとりといった利点が、このような大窯では格別重要なことであつたのではなかろうか。

毘沙クゼ第二号窯で焼成された製品は大形壺と大、中、小の甕であるが、その口縁部の製作手法から、知多半島古窯の編年中第2型式の後半に置き、その絶対年代を鎌倉時代中葉から後葉に求めたい。大形壺には知多半島では比較的少ない耳が三個付されたものがあり、いわゆる三耳壺の形態を備えている。しかも、耳がすでに紐を通すという機能を失つて装飾的に取り付けられているということもつけ加えておきたい。

遺物は全体に暗緑色の自然釉がかかり、多量の燃料による降灰と高温のかかつたことを示してい

るが、前述のように知多半島の粘土は耐火度が低く、温度が少しあがりすぎると大形製品は自重でへたりをみせるのである。本窯もその例にもれず、分焰柱近辺に多くの焼けつぶれた甕を検出した。

中形甕と大形壺は、口辺部から頸部にかけては回転台を用い、底部から上胴部にかけては輪積みによつて製作したのち、両者をつなぎ合わせて一個体としたと思われるのであるが、接着されたと思われる部分の外側に、突帯状に補修の跡がみられるものが2個体出土している。これは粘土で作らば乾燥する段階で生じたひびを補修したものと推定される。粘土は採集地点によつてその成分の度合が多少異り、従つて乾燥段階における収縮率も異なるのである。これらの製品は恐らく胴部から頸部にいたる部分と口辺部と別地点の粘土によつて作られ、それを接合したため起つた収縮率のズレによつて生じたキズであろう。しかし、それらを放棄することなく補修して窯入れをしたということは、製作の厳しさを示すものであろう。

印花文をもつたものは8個体の甕のうち、わずか3個体で、すでに印花叩きによつて輪積み部分を叩き締める必要性のうすくなつたことを物語っている。

(立松 宏・大下 武)

第五章 総括

1. 窯構造

常滑を中心として、知多半島の丘陵にみられる古窯は、窖窯といわれるものである。焚口につづいて燃焼室があり、床面の中央から天井にまでたてられた分焰柱の部分を境界として焼成室にうつる。焼成室は後部の床幅をひきしめて煙道部に接続し、最後は煙出しにおよんでいる。

毘沙クゼ第一号窯は、焚口から煙出しにいたる古窯の全長17mをはかる。第二号窯も、15mの長さが残存しているが、煙道部を亡失しているのので、おそらくこれも全長17m前後のものであつたであろう。知多半島や渥美半島そして瀬戸地方など、東海地方の中世古窯の全体を通じて、17mという古窯の長さをもつものは、渥美半島の大アラコ第二・第六号窯のような特別な例（註1）が知られるのみである。普通に大規模なものとしてあげられる常滑の窯は、全長15m程度が普通であり、こうした意味でも毘沙クゼ古窯址は最大級の古窯である。

毘沙クゼ古窯址群は大形の甕を中心として焼いた窯であり、焚口から燃焼室をとおり焼成室の前部へと、床面がほぼ水平にすすんでいる。しかし普通に甕をやく窯の構造として知られるものは、分焰柱の背後にあたる焼成室の前端部で数十cmも段をなして下降している様式である。

この甕窯として一般的に知られる窯の構造では、焼成室前部の床面に大形甕を窯詰めした場合、底部から下胴部にかけて火焰の流れの死角に入り、製品の上胴部から上がよく焼けても、下胴部は直接の火をうけることなく、意図的に半焼けの状態におかれたことが特色である。

ところが、毘沙クゼ第一・第二号窯の場合、こうした甕窯に好適の窯構造をとらず、燃焼室から焼成室へ床面が、ほぼ水平のまま移行しているのは何故であろうか。

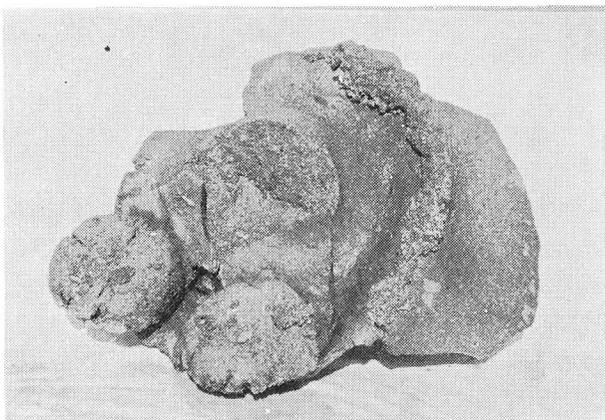
知多半島で産する粘土はもともと耐火度がひくく、こうした性質の粘土を使用して、大形製品を焼成する場合、製品全体にわたつておなじ調子で火焰を与えていくと、焼成の過程において、器体上部の重みにたえかね、下胴部の方がつぶれやすいという短所がある。知多半島の粘土を使用する時には、この弱点をおぎなう工夫が必要となつてくる。

毘沙クゼ第一・第二号窯の場合、焼成後に大形製品を窯出しするにあたり、分焰柱の付近を破壊しているので、その遺構を実際にみることはできないが、分焰柱の両側に、燃焼室と焼成室を画する間仕切障壁を高くきづいた例も他にはみられている。また焼成室の中へ製品を窯詰めするに際して、製品の下胴部に火焰が直接あたらないように配慮し、たがいに死角をつくるようにつめていくなど、大形化した窯構造にともなう量産化がはかられたものであろう。さきのべた焼成室前端部が段をなしておちているという甕窯特有の窯様式が、わりあい古式の甕窯にかざられていることから、この窯構造の合理化が想像されよう。

毘沙クゼ第二号窯の燃焼室南壁にそつて、天井を架構するのに使用したと考えられる支柱の穴が、数か所つらなつて検出（図版第四の下）されたのであるが、燃焼室の天井は製品窯出しのたびにとりはずされて、次の焼成にあたり窯詰めがおわると、そのたびに新しく作りなおされてくる。平安期の施釉瓷器の例であるが、瀬戸市の広久手E谷古窯（註2）や犬山市の赤坂第一号窯では、竹箆子のあとが明瞭な天井壁のブロックを多量に検出したのである。築窯の最終段階で燃焼室の天井を架構するにあつては、燃焼室の両側に支柱になる材をわたし、その上に竹を細縄であんだ箆子をかぶせたのち、スサをまじえた粘土で厚く塗りあげていつたようである。毘沙クゼ第二号窯の場合、柱穴の中に炭がみられないことから、支柱につかつた材はおそらく竹であつたであろう。

これとおなじ手法は、第二号窯の煙道部から煙出しにかけても検出された。焼成室末端から煙道部へ移行するところで切れているが、この窯では煙道部から煙出しの構造を工夫したようで、径約5cmの支柱穴が、床幅の全体にわたりみとめられ、スサ入りの粘土を厚くまいている。

第一号窯では、燃烧室と焼成室の境界にたてられている分焰柱がのこっており、大形甕を縦位にわたつたものや、



挿図第十二 大甕の窯詰と焼台の使用例（底面）

焼けへたつて商品的価値のなくなった中形甕を利用して補強してあつた。古墳時代にはじまる古窯構造の変遷の中で、分焰柱の設置は平安時代の初期に中国文化の影響として移入された技術であるが、燃烧室を真一文字にすすんだ火焰の流れが、分焰柱にぶつかり二つにわかれて両側の通焰孔から焼成室にすすむという。窯内の温度を平均化するのに役立ち、窯の大形化を支え焼成室の面積を拡大するためにも大きな役割をはたすなど、量産と燃烧効率の点で画期的な改良進歩であつた。

また第二号窯では、焼成室床面の中央両側にあたり、窯壁との境界部に近く、幅約40cm・長さ約5mにわたつて甕の破片をはりこんでいることが知られた。保温の目的をもつものと考えられる。

さらに第一号窯の焼成室では、中央より上の床面が階段状を呈していること（図版第 の上）が目目されている。この部分が階段状を呈することは、須恵器の窯では応々みうけられることであるが、規模の大きい中世古窯址では稀れな例である。また焼成室において大形甕を窯詰めする問題について言及したい。このことについては度々（註3）ふれた問題であるが、第二号窯から格好の資料（挿図第十二）がえられた。第二号窯の側壁近くに窯詰めされていた大形甕が、焼成の失敗から下胴部がくずれ、底部のみがはずれて床面に遺存していた。裏がえして底面を検討すると、側壁と反対側に片よつて焼台が2個はめてあつた。

最後に、煙道部については第一号窯では焼成室末端につづいて全体の輪郭をうかがう遺構がのこつていた。第二号窯では柱穴にスサを巻いた施設が指摘されたが、煙道の構造は窯の機能の優劣をきめる急所とされておき、各古窯とも焼成のたびに検討がかさねられ、改修が加えられている。

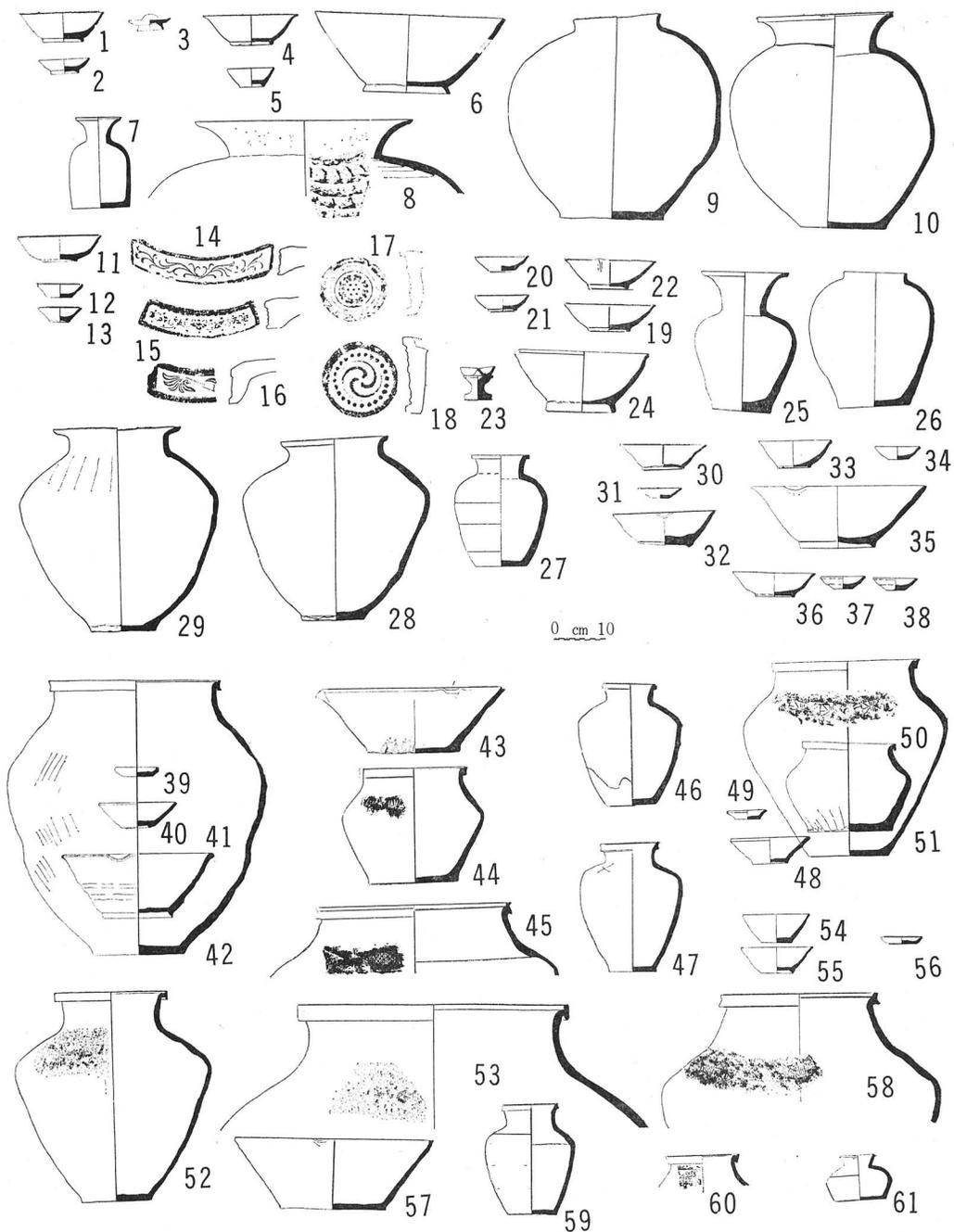
2. 出土遺物

昆沙クゼ第二号窯の製品は、常滑を中心とした知多半島の古窯製品の中で、鎌倉時代のもので13世紀にあたる時とされ、第二号窯の製品は半世紀もくだつた14世紀のもものと編年されている。

いま常滑を中心として広く知多半島の南北から発見されている古窯址の製品は、その器形や組み合わせにより、一般に第一・第二・第三の三型式に概括されており、平安時代末葉の12世紀にはじまつたものが第一型式とされているのであるが、第一型式から第二型式へ、第二型式から第三型式へ、そして第三型式の終末あるいは次の型式への萌芽など、それぞれ過渡的な推移もみとめられ、それらを加えた六段階に区分ができる。

昆沙クゼ古窯址の製品の特色についてのべる前に、製品の実測図（挿図第十三）をもとにしながら各型式について紹介してみよう。

第一型式 常滑の窯として総称される知多半島の古窯製品が論じられる場合、いつも例にだされるのが、京都市今宮神社で天治二年（1125年）在銘の四方仏石の下から掘りだされた三筋重である



挿図第十三 常滑製品の編年

第一型式（1～3 泡池第一号窯、4～10大知山古窯）、第二型式への過渡期（11～18社山瓦窯、19～26 梶廻間古窯、27巽が丘第三号窯、28・29旭大池第一号窯）、第二型式（30～32権現山古窯、33～35釜山第三号窯、36～38巽が丘第一号窯）、第三型式への過渡期（39～42巽が丘第二号窯）、第三型式（43～46加世端第一号窯、47～51小州橋古窯、52～53刀池第一号窯、54～61加世端第四号窯）

が、12世紀の初めには、すでに知多地方の丘陵には古窯がきずかれ、煙りをだしていたことを示している。

私の調査した窯の中で、第一型式であることがたしかめられた古窯址としては、大知山古窯の5基とか泡池第一号窯、椎の木第一号窯などがある。

製品には山茶碗・山皿・耳皿・大形鉢・三筋壺・短頸壺・長頸壺・大形甕などがみられる。山茶碗・山皿とも口縁部がゆるく外反し、まるく腹の張つた器形で、底部には仕上げのよい断面三角形の高台がつけられている。さらに大形甕は器高や腹径が70~80cmもある例があり、口縁部がすどく外反している。

行基焼の初現をかぎつた第一型式も、鎌倉時代の初頭にあたる12世紀の終末から13世紀前葉になると、第二型式への移行がみられるようになり、山皿の中に高台をそなえた第一型式のものと、高台のはぶかれた第二型式の山皿が、おなじ窯の製品として併存してみとめられるのが特色である。そしてこの段階になると社山瓦窯址・巽が丘第三号窯・旭大地第一号窯・梶廻間古窯址などの例が知られている。

第二型式 常滑地方の窯で、第二型式にあたる例として知られる巽が丘第二号窯について、先年東京大学理学部の渡辺直経氏に熱残留地磁気の測定による年代考察をもとめたのであるが、その結果、13世紀の前半または後半という報告をうけた。ほかには権現山古窯址とか、知多半島道路工事関係の古窯調査で発掘した釜山第一・第二・第三号窯や、深谷第一・第二・第三・第五号窯などがある。

製品の種類には、第一型式にみられるものが多くひきつがれているが、耳皿や短頸壺あるいは羽釜のような器種は姿を消し、壺など肩部の張りが弱くなっているものが多い。さらに山皿には、高台がまったく省略されており、そのかわり底部を心もち下方へつきだして厚くした作りだしの例が多い。

第三型式 第二型式から第三型式へ移行する段階の例として、先年、巽が丘第二号窯の年代について、東京大学の渡辺直経氏に熱残留地磁気方位測定を委嘱したが、13世紀後半または19世紀前半という結果の報告をされたものである。先行する第二型式にくらべて山茶碗・山皿・片口鉢ともに器形に大きな変化はみられない。山茶碗の側面にふくらみがうすれたり、山皿のたけが低くなっているのみで、片口鉢にも立派な高台がつけられている。ところが、この段階での大きな特色は、甕の口縁部にあらわれており、これまで先端まですどく弧をえがいて外反していた形から、口縁端の縁帯部がN字形に折りがえされた形に変化していることである。

そして第三型式が成立したのは、鎌倉時代の終末から室町時代へうつる時で、14世紀いわゆる南北朝時代といわれる時代である。加世端第一・第四号窯や小州橋古窯さらに刀池第一号窯で一括資料を検出し、山茶碗・山皿・片口鉢・三筋壺・小形扁平壺・長頸壺・甕・陶丸など、多彩な製品をみせている。

山茶碗の器形にみられた腹部の張りはなくなり、側面はほとんどまつすぐになつている。山皿は口径に比して底面の径が三分の二以上で、器高も低く文字どおり皿形となつている。甕の口縁部は縁帯部がN字状にたたまれた器形ですべてが統一され、大小の差がはなはだしく、小形のものは下胴部がみじかくそろばん玉に近い器形となつている。

×

昆沙クゼ第二号窯の出土遺物は、鎌倉時代にあたる13世紀のものと指摘したが、前にのべた編年体系からいえば第二型式である。甕など大形製品のみを焼いており、先行様式とよく似ているが、外反した口縁部の口縁端が舌端状になつていなくて、わずかであるが縁帯面がすでにみとめられるなど、先行様式とことなる点である。さらに本古窯址から出土する甕は口頸部が短かいが、工匠に

よる個人差と解釈すべきであろう。しいて絶対年代をいえば13世紀の中葉から後葉に比定されるべきものであろう。

そして第一号窯の出土品も、大形の甕や壺がほとんどであるが、分焰柱の補修など窯の整備につかわれている遺物と、最終時の焼成でやかれた製品の両者がある。

窯の補修につかわれているものの器形は、甕の口縁部にみられる縁帯面もわずかであり、第一号窯のそれにつづくものであるが、最終時の焼成品として出土した例は、第三型式に編年されるべきもので、口縁端につくられた縁帯部が幅広くなり、N字状に折りかえされた形に変化している。大きさは腹径60~70cmもあるものから、30cm程度のもので多彩である。この時期の甕にはもつと小形のものもあり、他の窯では10~15cm程度の腹径のものまでである。小形ものは下胴部が切れて短かいのが特徴である。第一号窯の最終時における焼成の品は、第三型式にあたり14世紀の中葉と比定されよう。

3. 甕の制作——紐づくり——

知多半島や渥美半島の古窯においては、甕や壺など、大形の製品を仕上げるのにロクロを使用していない。粘土を紐状にして順次に輪づみにしていく方法で制作している。

この技法はすでに平安時代後期の第一型式のころからはじまつており、大形の製品などすべてこの方法でつくられている。

腹径や器高が70cmもあるような大形製品をつくる場合、粘土がやわらかくては、制作の途中でつぶれてしまう関係から、輪づみの場合も全体を一気に仕上げてしまうわけにはいかない。2段から3段積みあげては、くずれない程度の半乾きになり、土がかたくなるまで一両日の間そのままにしておいて、次の段をつみあげていくというような工程をかさねていくのである。

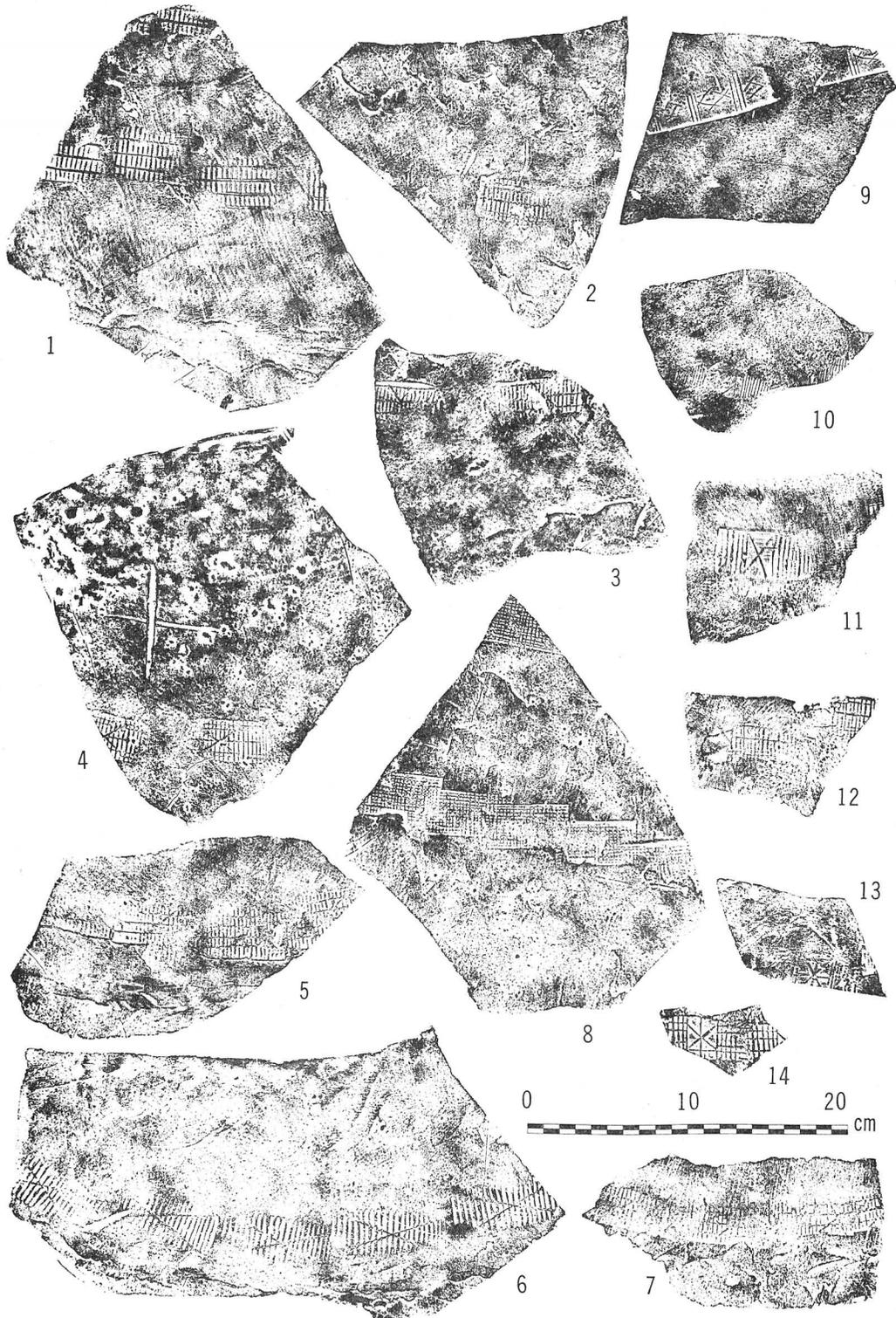
そして粘土の輪と輪の継目の接着を確実にするためにいろいろの工夫がなされ、工程の間の継目の面には、水を湿した布をかぶせたのはいうまでもないが、新しい段をつむにあたっては、継目の外側には押型をあてがい、内側には一握り程度の大きさの棒切れをあてたり、時に応じては指もつかつて、両手でつぶすようにして密着させていつたものであろう。この場合の押型にきざまれた文様がうつたものが、甕の表面にのこつた押印文様である。

平安時代後葉にのぼる第一型式の甕など、肩部から胴部にかけて3段あるいは4段にわたる押印の列がみとめられる。これは輪づみ技法による工程の時間的な段階を示している。古式のもの、とくに器壁がうすく仕上げられているが、下の方からこまかく工程をわけ、土の乾燥するのをまつて、おもむろに積みあげていつたものである。ところが鎌倉時代も中葉をすぎた第二型式のころになると、大量生産の必要から、この手間をはぶくために器壁を厚くし、数段かさねてから輪づみするなど、輪づみの作業の工程回数を少なくし、できるかぎり成形日数を短縮している。時代がくだるにつれて、甕の器壁が厚くなっているのは、工程の短縮により能率をあげて、大量生産の需要にこたえるという理由からでもあつた。

生産工程の短縮とともに、押印のほどこされる輪づみの段は少なくなり、第三型式のころともなると、押印文様はついに実用をはなれて、単なる装飾として肩部に一段のみ点々と施文されるようになった。

第二型式にあたる昆沙クゼ第二号窯からみられた押印文様は、挿図十二の3や4にあげたもの一種類のみであるが、第三型式にくだる第一号窯からは約十種類の押印が検出された。

第二号窯の例は、格子文様の上に斜格線を加えた簡単なものであるが、第一号窯の例は縦線・横線・斜線をほどこしたのみの簡単なものから、それらをかさねた複雑なものもみられる。文様自体も単純な単位をなすもののみでなく、挿図十四の9~14のように単位文様を2個あるいは3個も横



挿図第十四 毘沙クゼ古窯址群にみられる押印文様

へならべた長方形の押印原体の捺印面を構成したものもある。これら押印原体は古窯址で生活をいとなんだ工匠たちの手製になる道具であろう。工匠たちがおのずから愛用する例もあつたであろうが、窯の商標とまでいうべきでもない。しかし時代がくだると注文者の選択というか、指定ということもありうることであろう。

数の少ない特殊な例であるが、第三型式でも後半になつた室町時代のころには、片口鉢の内面など輪づみ成形とは関係のないところにも押印されており、末期には小形壺の肩部をかざるために、わざわざ小形の押印をつくつて施文しているものもあり、完全に装飾性を意図したことを示している。

なお、第二号窯の出土例であるが、押印文様の捺印されている上にあたる肩部に、篋によつて×印をかかれた資料(挿図第十四の4)がある。一般には窯じるしといわれているが、実際の施文目的はわからない。現在、こうした粘土の輪づみ技法は、「紐づくり」とよばれる特殊なテクニクとして継承されており、常滑地方全体でも数人の人人によつてのみ、伝統がまもられているものである。常滑市の文化財として指定されている松下松長さんは、この紐づくり技法をつたえる仲間の代表格である。大形の甕を篋でなでながら、手かげんによつて紐の目をとつていくのである。粘土の紐といつても、太さが径10cmほどもある棒のようなものであり、これを手の先から腕さらに肩にまでかけあげたり、かついだりしながら、陶工自身が制作物の外側を、何回も後ずさりをして廻つてつみあげていくのであり、作業自体もなかなか重労働である。

毘沙ヶ古窯址の発掘をみにこられた常滑市文化財保護審議会委員の村田正雄氏の父、伝次郎氏(84才)は紐づくり技法の場合の輪づみの段をよぶ単位に「ハギ」という言葉をつかつて、2ハギとか3ハギという表現をされ、さきに粘土の紐と仮称した粘土の棒を「ヨリコ」といわれた。そしてこの技法を「ヨリコづくり」ともよんでおられた。ヨリコの大きさについては、製品の規模によつてことなると前提し、長さは肩にかける程度であり、太さは大きい手でもつことができるといふことで、10cm程度が最大であろうと教えられた。伝統的な技法とともに、古い陶器製作者の中に生きていた言葉であろう。機械工業がはげしく押しよせる中で、伝統をきずき、そして守つてきた人々の保持される貴重な技術である。

注

- 1 久永春男・小野田勝一「愛知県渥美郡田原町大アラコ古窯址群の調査」(1964年、日本考古学協会昭和39年度大会研究発表要旨)
- 2 杉崎章・宮石宗弘ほか瀬戸市考土サークル『瀬戸市の古窯・第1集—平安期—』所収(昭和42年、瀬戸市教育委員会刊)
- 3 杉崎章・新海公夫・磯部幸男・猪飼英一・宮川芳照『大知山・旭大池古窯址』(昭和45年、知多町教育委員会刊)
杉崎章『常滑の窯』(昭和45年、学生社刊)

(杉崎章)

付載第一 南釜谷古窯址

1. 調査の経過

知多半島西海岸の中央部に位する常滑市の市域は南北に長く、名鉄電車常滑線はその半分までしか通じていない。南釜谷古窯址は、終着の常滑駅から一区手前の多屋駅で下車して、東へ約1キロの地点にある。多屋駅の北から支谷を東へたどつて、大野谷の奥の前山部落へ通ずる間道があるが、南釜谷古窯址は、その道路にそつた小高い丘陵の崖面に露出している。(挿図第一)地籍は常滑市多屋字南釜谷20番地であり、地主は井上芳一氏である。この付近には南釜谷のほかに、釜谷辻という小字名もあり、以前には本古窯のことを釜谷辻古窯と称している人も多かつた。

古窯址の付近は多屋部落の中でも、もつとも開発の急がれている土地で、すぐ奥には住宅生協による多屋団地が造成され、手前には新しく鬼崎南保育園が開設された。

古窯址の地点も、地形から判断してみると、道路に接した台地であつたと思われるのであるが、道路の方から土を取り、現在では道路から約30mも奥にある遺跡の地点まで崖となり、その中段に古窯址の床面が部分的に露出している状況であつた。

一方、南釜谷古窯址から出土する品物は、数多い常滑付近の古窯址から検出される行基焼製品とはことなり、釉の施されたもので、製品としては瀬戸地方の品物に近いものであつて、知多半島の古窯の中で特異的な存在であつた。そうした意味でも、常滑の陶業史を考える場合、常滑の窯の系譜の中で南釜谷古窯址がどんな位置をしめるのか、どのような役割をはたしてきたのか、誰れしも考える重要な課題であつた。

古窯は最初に沢田由治氏や令息によつて発見されたといわれるが、その後になつて多くの人々によりあばき掘られ、このまま放置しておいた場合、資料価値の高い古窯址が、未調査のまま崩壊する懸念もあつて、常滑市教育委員会では市に文化財保護審議会を設置した最初の発掘事業として、本古窯の調査をとりあげたものである。発掘は昭和44年3月24日から開始した。

連日、常滑高等学校の社会科研究会の諸君の参加をえ、学術担当は杉崎章であるが、立松宏・猪飼英一・磯部幸男の諸氏に調査員として応援をうけた。

窯の構造が、発掘する前に想像していた窖窯でなくて、規模の多きい連房式登り窯となり、調査期間も予定を延長して、ついに春の休暇中には完了できず、4月になつても土曜、日曜と作業をつづけ、全体の調査がおわつたのは4月の15日であつた。

2. 窯構造

南釜谷古窯址は、西に面した斜面にきずかれており、全体の傾斜が約20度のいわゆる連房式登り窯である。

窯の本体は、焚口から燃焼室の部分が水田の造成で立ち切られているが、残存する遺構は全長20mをはかる。現存する焼成室は室数7室をかぞえる。仮りに下方から第一室・第二室と順次よぶことにするが、前にのべたように燃焼室の部分がけずりとられており、遺存した窯構造の最下部が障壁となつていることから、第一室と仮称した焼成室の下に、最初の部屋がまだ存在したかも知れない。しかし床幅がすでにしぼられ、せまくなつているので存在していたとしても1室のみであろう。これら7室にわかれた焼成室が段をなして連続しているわけである。

窯にむかつて左すなわち北側の窯壁は、おおむね全体にわたり確認することはできるが、右手にあたる南側壁は土取り工事でけずられた崖面につづいているため、後部の数室では崩れおちている



挿図第十五 南釜谷古窯址の窯構造

ところもみられる。床幅もこうしたわけで完全な把握は困難であるが、最前端的障壁のところでは床幅2.6mであり、もつとも広いところは第五室における3mである。各室とも奥行よりも床幅の方が広い横長の形を呈しており、各室の大きさは別表に示すとおりである。それぞれ細部については相違がみられるものの構造や施設についてはよく似たものである。

各室の境界部に幅40cmの障壁が生まれ、障壁は格子状をした狭間脚の並列からなっている。それぞれの脚の幅は20cmであり、脚と脚の間隔も約20cmである。そして床面からアーチ形をした天井まで高さ約40cmを示し、奥行も40cm近いトンネルである。その奥の狭間穴^{さまあな}といっている部分は、約30cmの奥壁がほとんど垂直状態に立ちあがり、火焰の流れが次の部屋へ吹きだしていく仕組みである。垂直に切りたつた壁面はかたく焼けており、前室から流れこんだ火焰が、この壁にぶちあたるとともに、部屋一杯に入りこんだ役割を裏書きしている。狭間穴の数は、平均して7個であるが、もつとも幅の広い第五室と第六室の間にみられる障壁には8個の穴がみられる。

これらの施設をつくりあげるのに、本古窯の段階では、いまだレンガを使用しておらず、実際に確認できた場所は数箇所であるが、木を芯にして粘土をまきつけてつくりあげていた。(図版第九の上)

焼成室の各部屋に1個か2個、13~14cm角の支柱と思われるものがのこつている。

また左側の壁はほとんどつづいているが、右側にあたる南側壁においては、それぞれの部屋に入つてすぐ隔壁につづいて、製品の出し入れとか、薪の投げ入れに使用した入口が付設されていたらしく焼け具合がちがつていた。

そして天井の高さについては、正確な資料はえられなかつた。隔壁の中でもつともよく遺存していたところでは約90cmのこつていたところがあるので、1m前後でどうにか人の出入りに不自由なくできる程度と考えたい。

最後部にあたる第七室につづく狭間穴の奥壁は15cmほどの高さであるが、それから背後は煙道部であるらしく、幅は約1.8mで長さ1.4mにわたり、やや弱い赤く焼けた粘土塊の段が2段にわたりみとめられる。段の高さは8cmにすぎない。

3. 出土遺物

南釜谷古窯址より出土した遺物には多彩な種類の品があるが、ここにはとりあえず製品を碗・皿類、茶器類、仏具類、生活雑器の四つにわけ、加えて窯内で製品を焼く場合に使用する窯道具にわけてのべてみよう。

(1) 碗・皿類

a) 灰釉皿 (挿図第十六の1)

口径約14cm、高さ約3.5cmの皿で、高台はとくにすどく仕上げられている。胴部の全体に青みがかつた灰釉が広くほどこされている。

b) 絵付皿 (挿図第十六の2)

口径約21cm、高さ約3cmの皿に、富士山ならびに麓の松原を描いたものである。

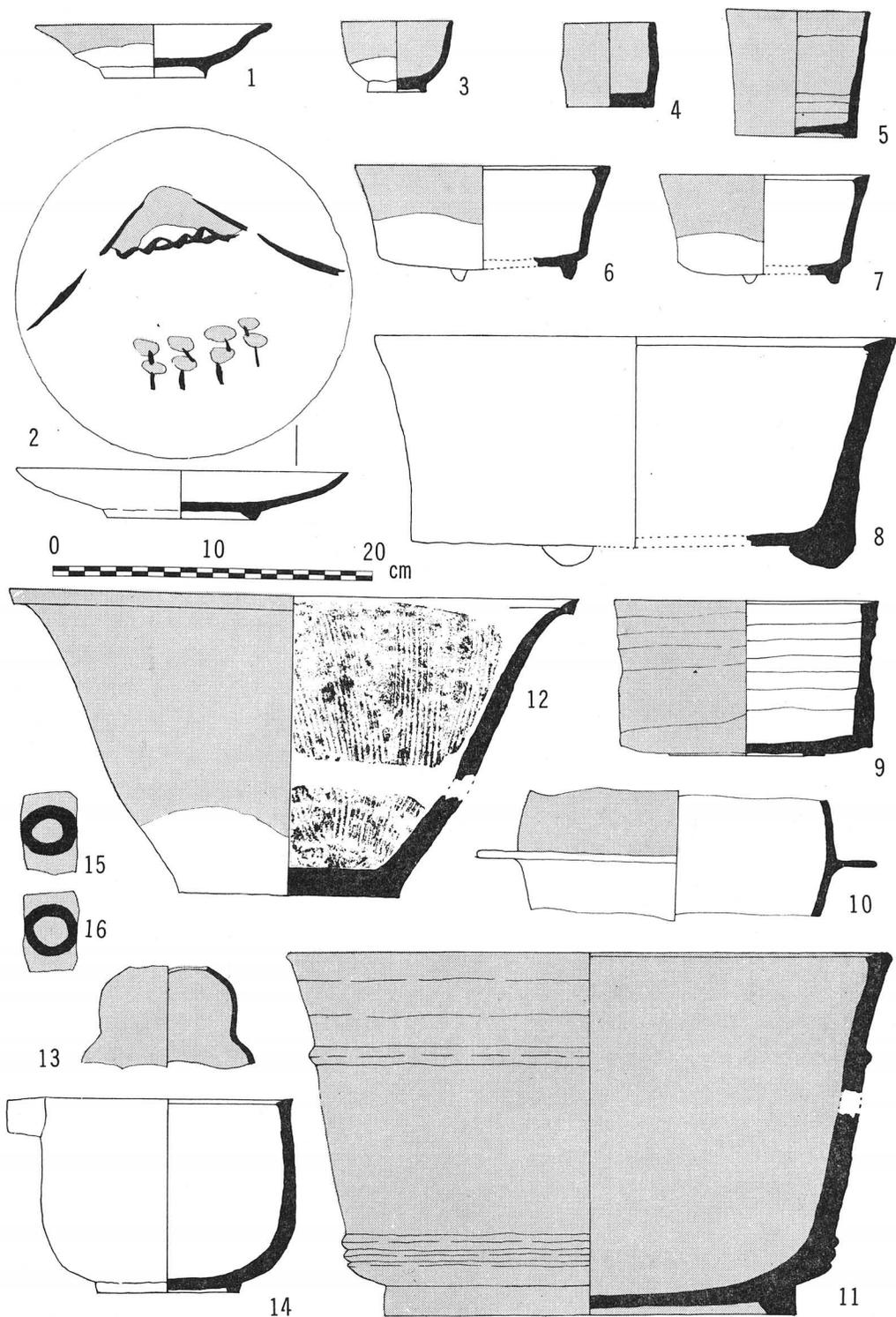
絵付けの顔料としては、富士山の輪郭や雲ならびに松の幹には、鉄の釉をもちい、山頂の雪景色や松の葉は長石系の絵ぐすり^{えぐすり}で白く色どられている。

瀬戸地方においても絵付けの製品があらわれるのは桃山期以後のことであり、この製品の存在は、この窯の年代上限をうかがうのに大きな意味をもつ資料となつている。

付表第三
焼成室各房の大きさ

房	奥行	床幅
一	90	260
二	120	280
三	80	280
四	120	290
五	100	300
六	80	—
七	90	—

単位cm



挿図第十六 南釜谷古窯址の出土遺物

1. 灰釉皿 2. 絵付皿 3. 小天目 4・5. 蓋置 6・7. 香炉 8. 洗 9. こぼし
 10. 茶釜 11. タライ 12. 擂鉢 13. ひさご形小壺 14. 片口 15・16. 陶錘

底面の高台の中にそつて、重ね焼きの時にはめたトテの痕跡が4か所みとめられる。

c) 碗

まとまつた器形ではないが、飴釉を口縁部に施した小碗があり、大きさは(1)の a) にあげた灰釉皿の程度である。

(2) 茶器類

a) 小天目 (挿図第十六の3)

口径約7cm、高さ4.5cmの大きさであり、真黒い天目釉を内面は全面、外面は高台のあたりのみをのこして広く施釉してある。

b) 蓋置 (挿図第十六の4・5)

茶釜の蓋をおくのにつかわれる筒形の道具で、本古窯の製品として図に示した2例は、底に高台をもつものともたないものであるが、一般的には底の抜けている例も多い。底面をのこした内外の全面にわたり、茶褐色を呈した鉄釉がみられる。

c) こぼし (挿図第十六の9)

口径約17cm、高さ10cmの大きさで、低い高台をもっている。胴部は下部にいたるまで垂直に立つた厚手の器であり、口縁部から下部へ白い長石系の釉がかけられている。

d) 茶釜 (挿図第十六の10)

胴径約20cmの外側に幅2.5cmのツバをもっており、口縁部はわずかに内傾している。内面は全面に外面はツバの線から上に、茶褐色を呈した鉄釉がほどこしてある。

e) 茶入れ

灰釉のかかつた丸いもの1個である。

(3) 仏具類

a) 香炉 (挿図第十六の6・7)

口径約16cmのものと13cmのもの2例を図に示したが、高さはいずれも7cm前後である。胴部は底部へかけてわずかにせまくなつており、底部には3個の小さい足が付されている。内外の全面に薄茶色の釉がほどこされ、さらに上半部には黒褐色の鉄釉がかけられている。

b) タライ (挿図第十六の11)

口径約38cm、高さは約23cmの大きさで、1.5cmの器壁をもっている。底部に付されている高台も重厚である。

木製のタライを模していて、竹のタガに相当する凸帯を、上胴部に1条と下胴部に2条めぐらしている。そして器壁の全面に茶褐色の鉄釉がみとめられている。

沢田由治氏は、この製品の用途を仏前にそなえる水を入れたあかぼち閉伽鉢にあてておられるが、妥当な見解とすべきであろう。

c) 仏花器

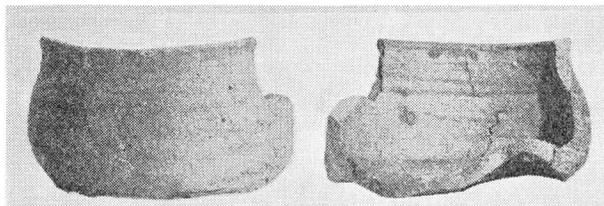
全面に茶褐色の鉄釉をかけたもので、耳の部分のみが検出されている。

(4) 生活雑器

a) 搗鉢 (挿図第十六の12)

口径約35cm、底径約14cm、高さ20cm弱の大きさで、鉢の内面に約10条の刻み目を同時にほどこすことができる櫛で筋がつけられている。

瀬戸地方では、搗鉢の生産は室町末



挿図第十七 窯道具 一匣鉢一

期にはじまつており、初期のものは刻み目の本数が少く、1組4本程度で底面には施されてはいなかった。しかし本古窯の時期になると、底面一杯につけられ、側面も相当に上までみとめられている。

b) 片 口 (挿図第十六の14)

口径も高さも約15cmの大きさで、半球形を呈した器形である。口縁部に樋のような注ぎ口をつけられたもので、底部には低い高台がみられる。

一般的な器形であるので、いろいろに使われるが、酒やしょう油など液体状のものを樽からだすのにもちいる。

c) 洗 (挿図第十六の8)

センといっている器で、口径33cm、高さ15cmの大きさで、器壁は厚い。底面には3個の足がついている。

調理の時、食物やその材料をならべるのに使用したり、時にはハンゾと称して手を洗うのにも供された。

d) ひさご形小壺(挿図第十六の13)

胴まわり10cm強の小壺で、中央がくびれ、ひさご形を呈している。

本品は液体容器、とくに酒を入れる徳利としてつかわれたものと考えられよう。

ひょうたんの実でつくったひさごを模した器形であるが、この形は古来、日本人に愛好され、生活の中へとけこんだようである。

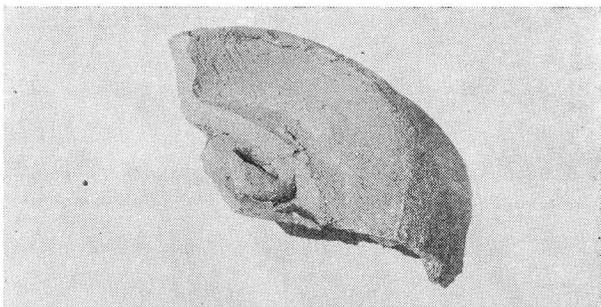
e) 油 さ し (図版第十二の13)

小形の土瓶形をした注口土器で、球形をした胴部の肩と注ぎ口近くに耳があり、つるを通してている。本古窯からはこの胴部の肩に付された耳の部分が検出され、最大腹径10cm弱、高さも6cm程度の大きさである。

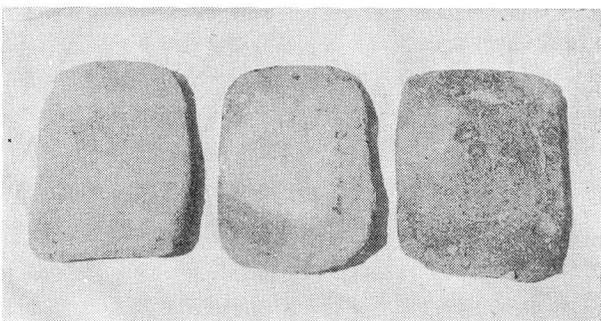
燭台や皿に灯明油をつぐのにもちいる道具である。

f) 陶 錘(挿図第十六の15・16)

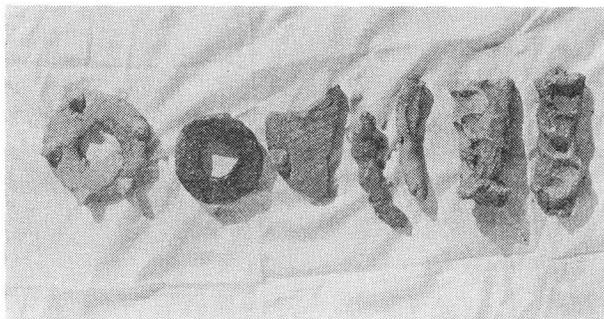
漁撈などの生産につかわれたおもり



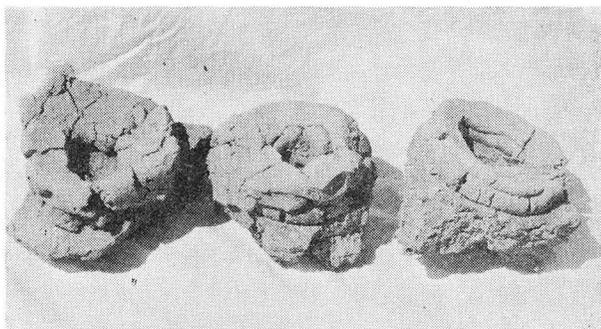
1. 匣鉢の内部に輪ドチを入れ、その上に製品をつめた状況 (匣鉢の底からみる)



2. エブタ



3. 左から 足つきドチ、円形足つきドチ、よりひも、ニギリ



4. 焼台の上に輪ドチをすえたところ

挿図第十八 窯道具のいろいろ

であり、長さ5cm、腹径3cm程度の大きさである。

(5) 窯道具

a) 匣鉢 (挿図第十七)

普通にエゴロといっているもので、口径18cm程度で、高さは約12cmのものが多いが7～8cmのものまである。

釉をほどこした品などを焼く時に、これに納めて窯詰めしたものである。

匣鉢の底部は、窯に詰める時にかさねやすいように底出しとなつている例がほとんどである。

b) エブタ (挿図第十八の2)

匣鉢のフタに使用したものである。

矩形をしているので、匣鉢からはみだした部分にも、小形を器物をならべた痕跡がみられるが、やがて棚板として発展するもとなつたものであろう。

c) 輪ドチ (挿図第十八の1・4)

形に大小があり、大形のは焼台の上ですえて、大形の品や匣鉢などが安定するようにしたり、小形のものの中には、匣鉢の内部の底に入れて、貴重な品をおさめるための窯詰め安定や、底に焼きひびの入るのを防ぐのに使用される。

d) 足つきドチ (挿図第十八の3)

輪ドチに数個の足がついたもので、品物の内底にすえて、その上に別の品物をかさねてすえるためのものである。

e) 円形足つきドチ (挿図第十八の3)

輪ドチではなく、円板形の隔板に数個の足がついたもので、足つきドチと同様にもちいられている。

f) トチ (図版第十二の10)

品物をかさねて焼く時につみあげる場合に、密着を防ぐ方法として簡単に任意の形の粘土をはさんだもので、普通にトチとよんでいる。挿鉢に使用したもの(図版第十二の10)など下部に刻み目がついているのでわかる。

g) よりひも (挿図第十八の3)

匣鉢と匣鉢の間にはさんで隙間をなくするもので、簡単に手でまるめてつくっている。

h) ニギリ (挿図第十八の3)

粘土を手でまるめて棒状にしたものであつて、積みかさねた匣鉢が安定して倒れないようにするためにつかわれている。

4. 後記

南釜谷古窯址を調査した結果、本古窯址は常滑市内はもちろん知多半島にも類のまれな古瀬戸系統の古窯址であることがわかった。さらに重要なことは、本古窯址の窯構造であり、知多半島の他の窯とちがいが、すでに連房式登り窯の型式をとつていた。

知多半島には本古窯址のほかに、もう1基の古瀬戸系統の古窯址が知られている。それは知多半島の先端から約2kmの海上にうかぶ南知多町の日間賀島に存在していた下海古窯址(注1)である。私は数年前、そのころ日間賀中学校に在職していた宮川芳照(現・丹波郡大口北小勤務)おなじく師崎中学校に在職していた磯部幸男(現・知多郡武豊小勤務)の両氏とともに、下海古窯址の調査を担当したことがある。

下海古窯址は分焰柱の背後にあたる焼成室の前端部床面に段があり、段の下で分焰柱直後にあたるところに数本の支柱を格子状にたてている遺構があつた。

それからのち、私は瀬戸市教育委員会より招かれて、瀬戸市の水野にある昔田古窯址の調査を担当する機会にめぐまれたのであるが、これが日間賀島の下海古窯址とおなじ年代であつて、窯の構造も良好な条件で遺存（注2）していた。すなわち分焰柱背後の焼成室床面に、中軸線にそつて3本の支柱がたてられていた。昔田古窯址や下海古窯址の段階は、いまだ連房式登り窯という形ではなく、かつて榑崎彰一氏が信楽窯で調査した双胴式の焼成室をもつた古窯（注3）と同じ築窯の構想であるが、瀬戸地方の場合は地の利をえて支柱で用を足していることを指摘（注4）したことがあるように、古来の窖窯の型式をうけつぐ中で、窯の規模が拡大されるとともに、半地上式の登り窯へ移行していく過渡段階として評価されるべきものであろう。

瀬戸地方の古窯の中では、焼成室を隔壁により前室、後室にわけた例として小長曾古窯址が知られ、製品の型式から昔田古窯址よりやや先行するものとされている。

そして昔田古窯址につづく時期のものとしては、尾呂古窯址の存在が知られている。

尾呂の古窯址は未調査であり、表面採集の資料でみる知見にすぎないが、仲々のすぐれた品物がそろつている。そして編年的には、このたび調査した南釜谷古窯址とはほぼ同一年代に比定されている。学術調査をされていないので明確にのべることはできないが、遺跡の現状を表面から観察する範囲では、これもおそらく連房式登り窯であろうといわれている。（注5）

瀬戸地方においては、小長曾古窯→昔田古窯→尾呂古窯という古瀬戸後期の変遷の中で、在来の窖窯から連房式の登り窯へ、窯の構造が次第に改良されていつたものである。

そして昔田古窯址の時期には日間賀島の下海古窯址があらわれ、尾呂古窯址の時期にはすなわち南釜谷古窯址といつたような形で、瀬戸地方で研究され成立した築窯技術が、それまでの知多半島における築窯とは関係なくもちこまれたものであろう。

それにしても南釜谷古窯址は、一般的な連房式登り窯の築窯とはことなり、いまだ木芯を中心として粘土でまきあげていくという初期的な方法であつて、レンガを使用した新しい形とはちがつて、いる点など、連房式登り窯の中では最古に属する例であらう。

一方、焼成室の各房に2個前後の支柱が横に配置されているものを、特別な品物を焼くための台として考えたのであるが、ほとんどすべての支柱が狭間穴の直前にすえつけられていることから、狭間穴へすいこまれ、焼成室の次の房へ吹きあげられていく火焰の流れに対し、分焰支柱のような役目も果たしたものであろう。

×

製品としてあげた多彩な種類のそれぞれは、ともに古瀬戸陶器の後期を示す品であるが、とくに絵付皿など古瀬戸陶器としても桃山期になつてはじめて出現する技法であり、南釜谷古窯の成立年代を示唆するものである。

播鉢の内面にみられる刻み目も室町時代のころのような、3～4本の目を側面のみにかきあげたという形ではなく、すべて10本前後の目をもつ器具を使用しており、側面も相当に上までかきあげ、底面も一杯に刻み目をつけて効率を高めている点など、窯構造の面で初期の連房式登り窯ということと考えあわして、築窯年代を近世初期、強いて年代をあげれば慶長のころに比定されるものであろう。

常滑地方の窯業が幾変遷する発展の中で、一つの局面に遭遇した時、瀬戸の地方から指導者を招いて新しい型式の窯を築き、製品も瀬戸地方で普及しているものをつくつてみた。しかし、その成果は継続する生産がつづかなかつたことでもわかるように、粘土の性質もちがひ需要もことなる地方とて期待したほどではなかつたものであろう。やはり常滑地方の窯業は、低温度で焼けしまるという知多地方の粘土の特性を生かした大形製品、すなわち大形甕や大形壺の生産にこそ、将来の生命を知らされ、それがやがて陶管の生産をもつて代表される常滑地方窯業の進み方を暗示したもの

と考えるべきであろう。

いつてみれば、常滑窯業の発展史上のエポックを画する一つである。

註

1. 杉崎章・宮川芳照・磯部幸男「尾張国日間賀島下海古窯址の調査」『瀬戸市の古窯・第2集一八幡古窯址一』所収（昭和44年、瀬戸市教育委員会刊）
2. 瀬戸市教育委員会の事業として、杉崎が学術担当者となり、瀬戸市考古サークルとともに調査した。
杉崎章・宮石宗弘「瀬戸市昔田古窯址群の調査」（昭和44年、日本考古学協会第35回総会研究発表要旨）
3. 榑崎彰一「滋賀県信楽町中井出古窯址群の調査」（昭和43年、日本考古学協会第34回総会研究発表要旨）
4. たとえば杉崎章『常滑の窯』（昭和45年、学生社刊）
5. 瀬戸市史編纂委員宮石宗弘氏の教示による。

（杉 崎 章）

付載第二 上ゲ遺跡

1. 上ゲ遺跡と知多半島の製塩遺跡

上ゲ遺跡^{あげ}の位置は、常滑市立鬼崎北小学校の中にあり、屋内運動場の敷地を中心として校庭の一部にひろがっている。地籍は常滑市西之口字上ゲ61番地に属している。

名鉄電車常滑線の西之口駅を下車して西へ約100mいくと、電車路線と平行して国道277号線が通じているが、国道にそつた西側に鬼崎北小学校屋内体育館の屋根がみえる。遺跡はその付近である。

大正時代の初年のことであろうか、鬼崎北小学校の旧校舎を建設する時に、北西の隅から角形^{つのがた}をした異様な土器がカマスに一杯も出土して注目をあびたとは、常滑市大野町に在住する郷土史研究家の江本半助氏の談である。こうして上ゲ遺跡の存在については、文部省や県の関係当局へ知られており、古く昭和初年から遺跡地名表に登録されていたものである。

しかし、他の先史遺跡とは性格のちがつたもので、製塩遺跡ということがはつきりしてきたのは昭和30年のころのことである。そのころようやく全国的にすすめられてきた古代製塩の研究により、古墳時代から奈良時代につづく土器製塩の遺跡であることが判明してきたのである。

全国では瀬戸内地方をはじめとして、若狭・和泉・紀伊・淡路・尾張・三河・能登・佐渡・肥後などにわたり、おなじような条件で遺跡が検出されてきた。知多半島では約30地点が知られ、渥美半島では6地点が知られる。知多半島の30地点は、先端の師崎地方や伊勢湾にそう東海市付近に密集しているが、日間賀島では横穴式石室の中に副葬品として製塩土器をもつた古墳が発見されたり美浜町奥田の海岸には大規模な遺跡が知られている。そして上ゲ遺跡は常滑市域で発見されているただ1か所の古代製塩遺跡である。

ところで知多半島の古代製塩遺跡が一躍にして全国的に有名になつたのは、奈良の平城宮址の発掘であり、昭和38年の第13次調査にあたり多数の木簡資料が出土した。中に地方から納められた調塩につけられた荷札があるのであるが、調塩付札の17点の中の3点は知多半島の関係であつた。

出土した木簡は、南の方より富具郷野間里（天平元年）、^{にえしろう}贄代郷朝倉里（天平元年）、^{はが}番賀郷花井里（神亀四年）の地名がでている。これには納税者の名前が記されており、とくに野間里の例には、納税責任者である郷長の名もみられ、それらがすべてワニベである。天平六年尾張国正税帳で知られる智多郡の少領がワニベ臣若磨であるなど、従来からもワニベが尾張国智多郡一帯に蟠居していることが知られていたのであるが、ワニ氏といえは古代日本において、大和朝廷をとりまく諸豪族の中で、最初に東海地方へ進出したものである。そうしたところへ今度の平城宮址木簡の調塩付札からうかがえる知多郡の関係者は完全にワニベであつたということは、これらのことを裏づける資料である。

2. 古代海浜集落の構造

古い製塩技術を物がたる言葉として、古くからいわれ万葉集などにも「藻塩やく」という語句があるが、この製塩工程をさらに具体的に説明すると、海藻^{もしお}を直接に焼いて塩をつくるというのではない。海水を濃縮させていく作業と、できた濃い塩水を煮沸させていく仕事の両段階を同時に表現したものである。そして前にいう海藻の利用は、この場合の濃縮工程であつて、刈りとつた海藻を乾燥させ、塩の結晶が十分に付着するとまた海水をかけて、塩度の高い水をつくり、これをくりかえして濃度を高める方法である。

そして製塩工程の後段階はいわゆる煎熬^{せんとう}作業であり、濃縮された塩水を小形の土器に入れて煮沸するのである。

このようにして製塩工程を濃縮と煎熬の両段階にわけるとは、今も昔もかわっていない。海藻をつかした濃縮工程は、やがて塩田となり、揚浜式から入浜式へとすみ、塩水を煮沸する煎熬工程は、中世になると小形土器から鉄釜とか石釜を使用する方法に改良されているものの、考え方としては、現在の近代的経営における流下式製塩^{しじょうか}であっても、枝条架と流下盤を組み合わせていて、原則的にはかわっていない。

古代における土器製塩の方法は、近藤義郎氏を中心とする瀬戸内海の喜兵衛島遺跡の調査によつて最初の成果があげられたのであるが、喜兵衛島をはじめとした製塩遺跡において、その生産遺構が次第に把握されてきた。すなわち海にのぞんだ砂浜の中に、楕円形平面の炉が検出され、その周囲に作業場と考えられるタタキ面が拡がり、タタキ面の後方に炉の作業で機能を果し、破損した製塩土器をかきだし遺棄した堆積層がみとめられるという、有機的な一連の生産活動が報告されている。瀬戸内海の喜兵衛島をはじめ、石部正志氏の調査された若狭湾の遺跡では、炉の平面に石が敷かれた構造が検出された。

一方、遺跡の生産内容が製塩であつたということの立証についても、科学的な裏付けがなされている。各工程の中で塩化ナトリウムについては可溶性であるため検出できないが、不溶性の炭酸カルシウムは多くの面に残存しており、とくに炉の中の敷石やその直下から、鉛色の膜状物質の形で検出できたといっている。

知多半島では、上ゲ遺跡とおなじく同一地点で各時代にわたり生活がなされた歴代遺跡が多く、具体的な生産遺構をみとめることは困難であるが、護岸堤防の外側で発見された南知多町の清水遺跡などでは、波による侵蝕のために柔かい部分が洗い流され、炭酸カルシウムがしみとおろし、かたくしまつた平担面のみが50m近くもつづき、炉と考えられる焼けた面が点々とみとめられている。

3. 上ゲ遺跡の調査概要

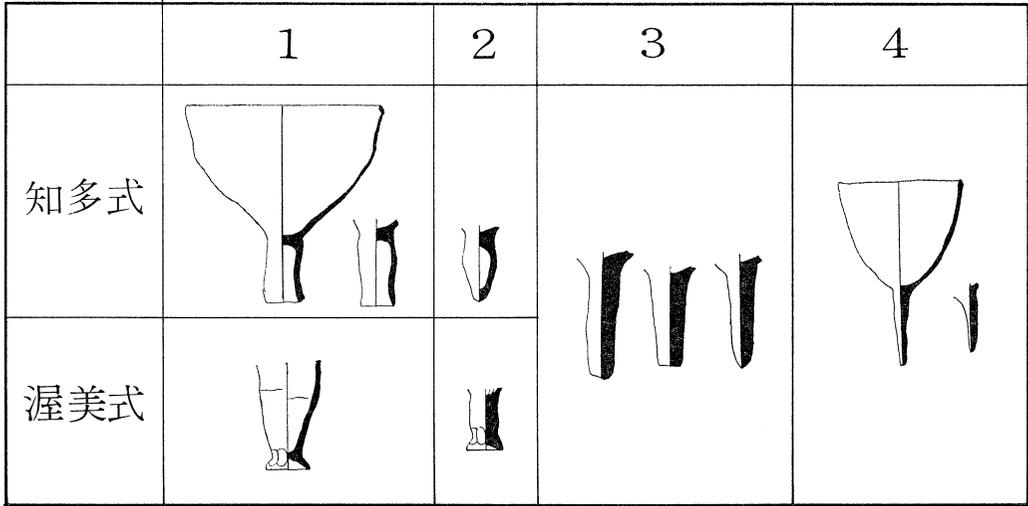
上ゲ遺跡はもちろん塩の生産遺跡であるが、貝塚が形成されて生活址も近かつた。

昭和45年の5月2日と3日の両日に実施した調査は、海岸線と平行に長さ10mで幅1.5mのトレンチを設定し、つづいて直角に長さ5mで幅1.5mのトレンチを掘つてみた。深さはいずれも約1mで、地山の海成砂層に達したが、最初のトレンチの北部で基盤の直上から、奈良時代の住居址床面と推定される生活面の検出に成功した。遺跡が砂地でこわれやすい点と、床面の中央にコンクリート基礎が打ちこまれていることから、古代漁民の住居址を完全に復元できなかつたのは惜しまれる。

製塩の炉址については、校庭の各所に焼土や灰層がみられることから、多くの遺構が近くに存在することがわかるのであるが、発掘の範囲では明らかにできなかつた。また出土品については、大部分が角形の脚をもつ第4様式の製塩土器であり、脚部の例を約100点も採集した。

私は校舎が新築される前の状態を知っている。すなわち調査地点から数mも西へへだてて、学校の敷地とは段をなして低い水田地帯がみられたのであるが、このたびの校地拡張にあたり、水田が埋め立てられたのであつた。いいかえれば元の校地は、それ自体が古い海岸線を示す砂堆であつたわけである。

砂堆の西側で水田に近い部分に製塩遺構が点々と露出していた知見も多かつたのであるが、水田の埋立てと同時になされた敷地の平担化をめざした工事のため、遺構を示す地点をみうしなつてしまつたわけである。



挿図第十九 東海地方製塩土器の変遷（実測図は縮尺4分の1大）
 第1・2様式（知多式いずれも松崎貝塚、渥美式いずれも青山貝塚）、第3様式
 （中央・大森遺跡、左右・下浜田遺跡）、第4様式（いずれも大森遺跡）

4. 東海地方の製塩土器の変遷

最後に上げ遺跡をはじめとする知多半島や渥美半島で知られる製塩土器について紹介したい。

東海地方の製塩土器は特殊な脚をもっているので、特殊脚台付土器ともいわれる。知多・渥美半島ともそれぞれ第1様式から第4様式にわけられるのであるが、渥美半島と知多半島とは、その発生期の様式がことなっており、知多式ならびに渥美式といわれている。すなわち知多半島における第1様式は、袋形とか筒形を呈した脚台の上に深鉢形の坏部をつけた器形である。それが第2様式になると、土器を炉の床面へさすために脚台の先端をしばり棒状とし、先端をとがらした角形となつている。脚台部が中空となつているのが特徴である。さらに第3様式になると外観は第2様式とまったく同様であるが、棒状をした粗製の角形脚台の内部が充実している。第四様式になると、鈍重の感がのこつていた第3様式を、土器の安定とか量産化という点から改良した最後の様式であつた。

一方の渥美半島の第1様式は、坏部がコップ状で小形の倒坏形脚台をそなえた土器である。第2様式となると脚台部が長くのびた形であり、第1・第2様式とも知多半島の製塩土器とは系統がちがつている。

知多式・渥美式とも第1・第2様式は六世紀、第3様式は七世紀、そして第4様式は八世紀に比定されており、上げ遺跡のそれは、第四様式が大部分であり、第3様式にのぼると考えられるものが数点みとめられている。

（杉 崎 章）

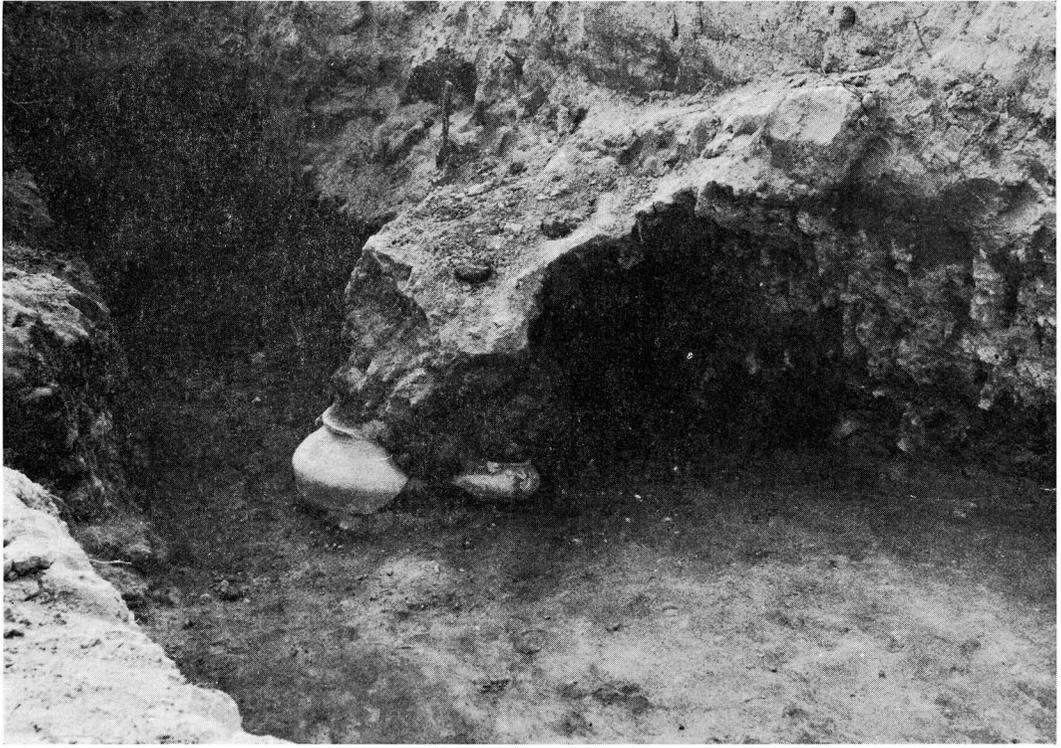
図版第一 毘沙クゼ第一号窯



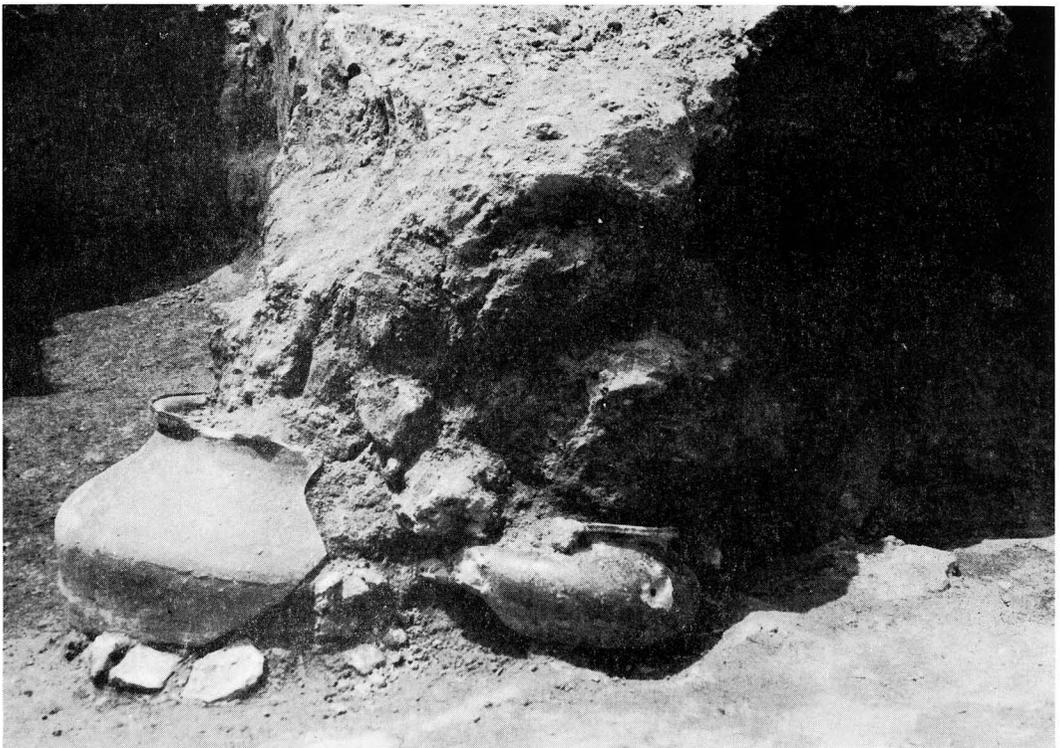
毘沙クゼ第一号窯の全景



毘沙クゼ一号窯南側壁の鋤先痕



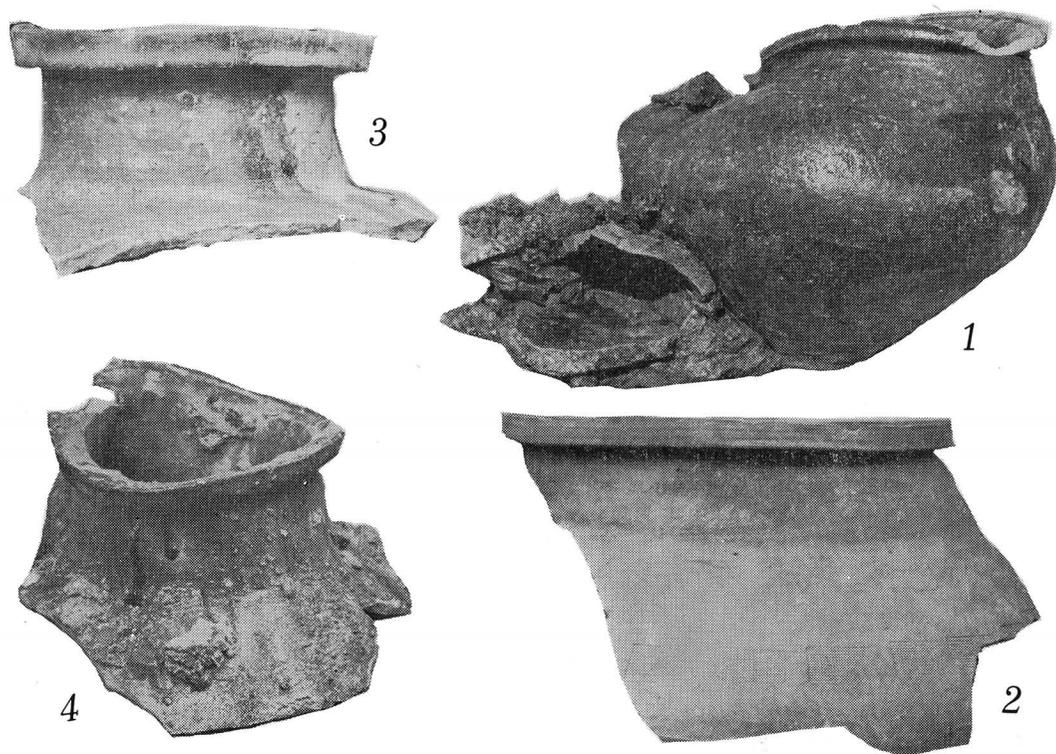
焼成室より分焰柱をとおして燃焼室をみる



分焰柱付近の大甕による補修状況

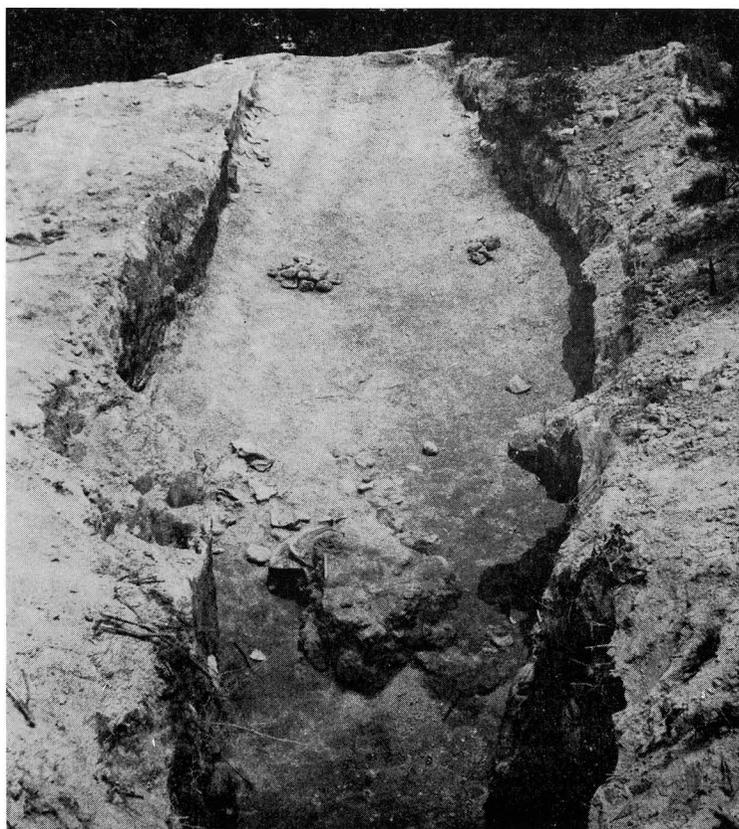


焼成室後部の階段状遺構



毘沙クゼ第一号窯の出土遺物

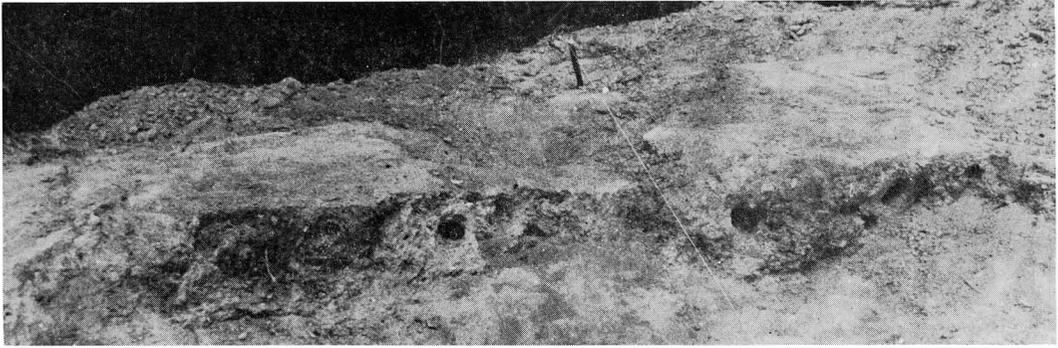
図版第四 毘沙クゼ第二号窯



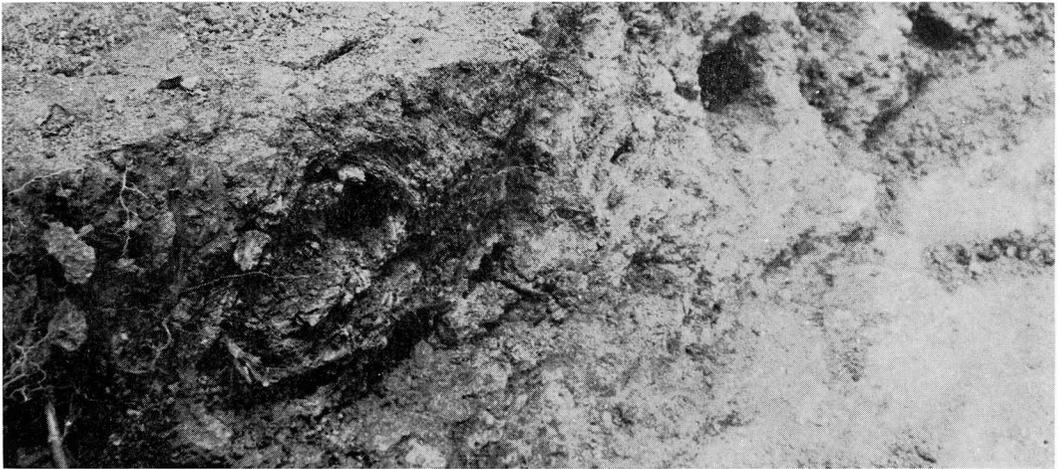
毘沙クゼ第二号窯の全景



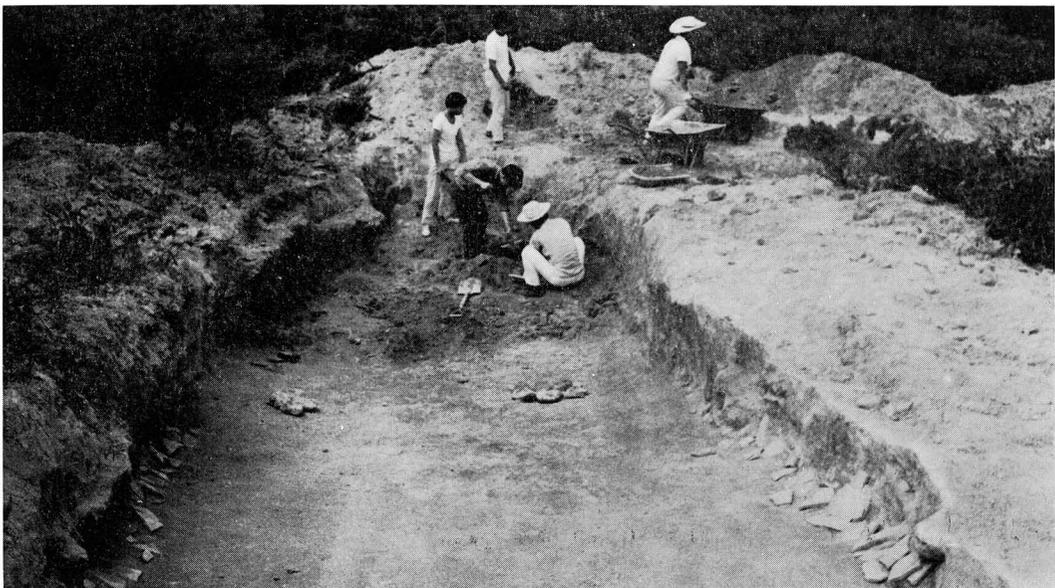
燃焼室南側壁付近にみられる支柱穴群



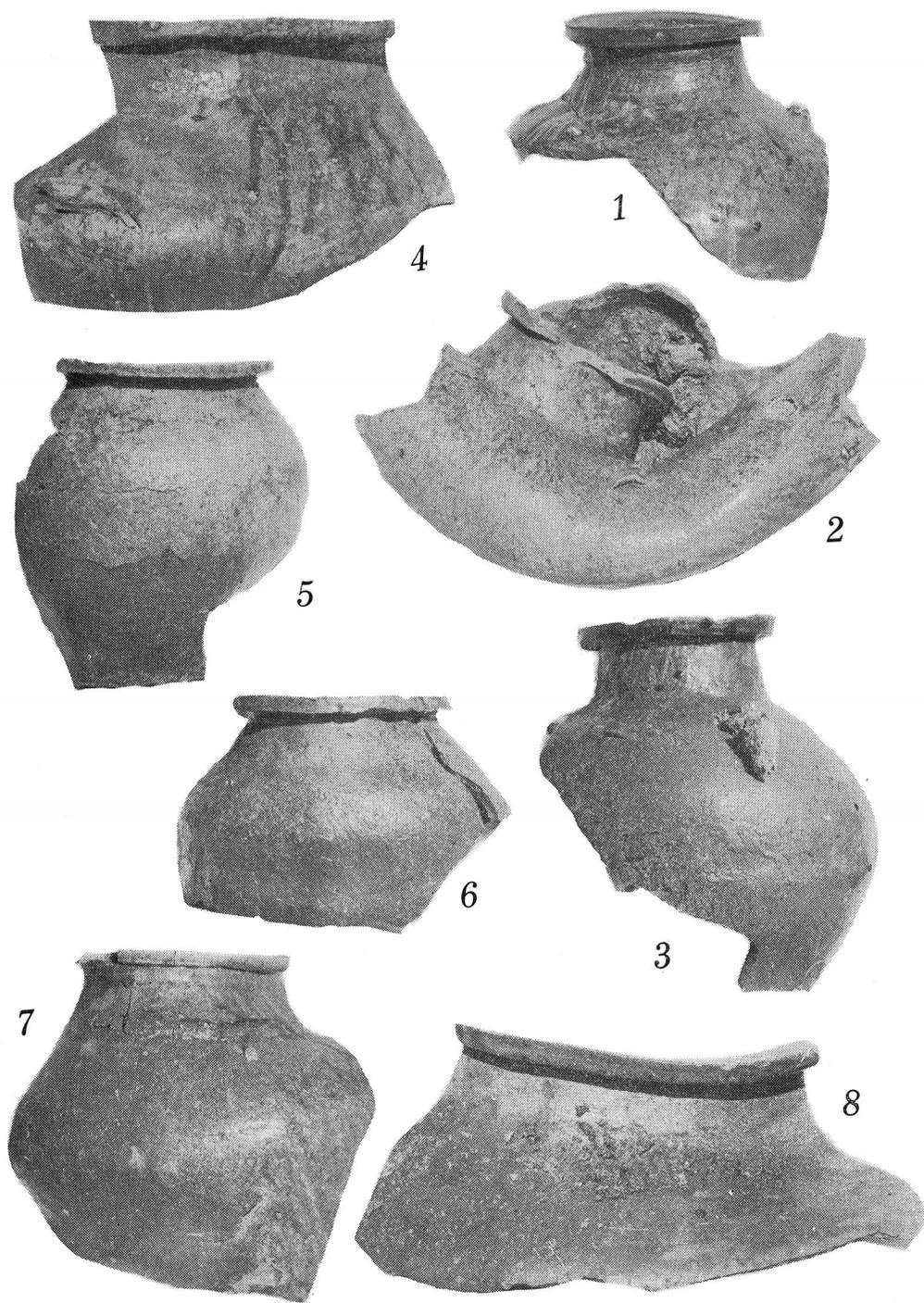
焼成室末端の支柱穴群



同上部分拡大（スサ入り粘土で支柱をまいている）



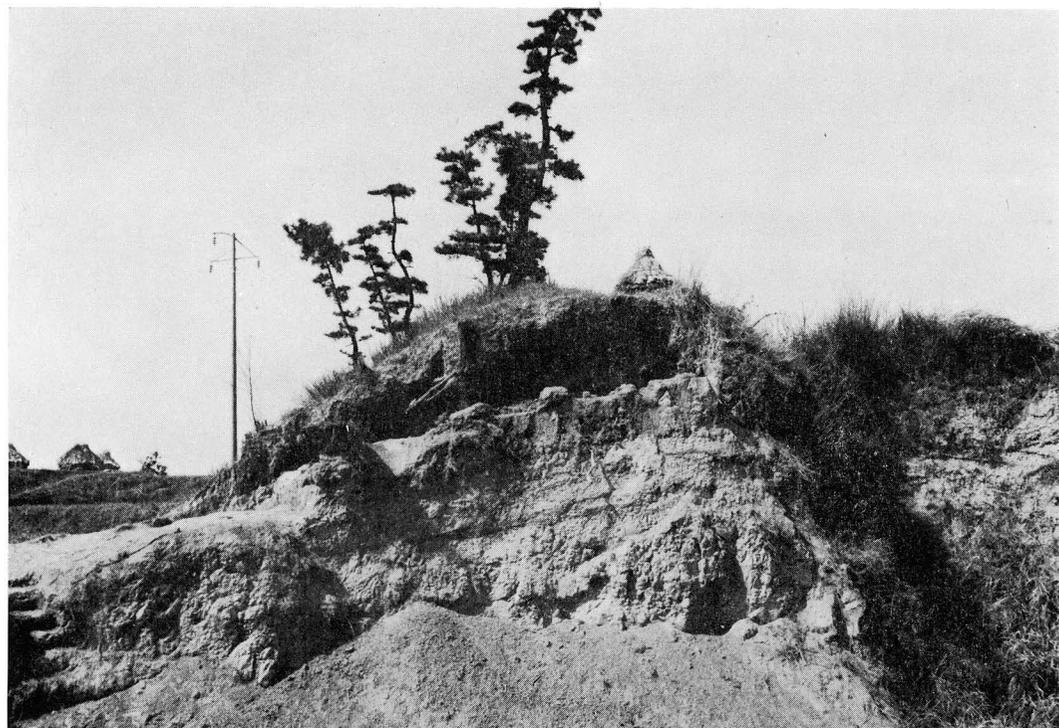
焼成室両側壁下端の甕片貼付状況



毘沙クゼ第二号窯の出土遺物



発掘調査遠景



南釜谷古窯址遺構の側面観



隔壁にみられる狭間穴と狭間脚（手前は支柱）



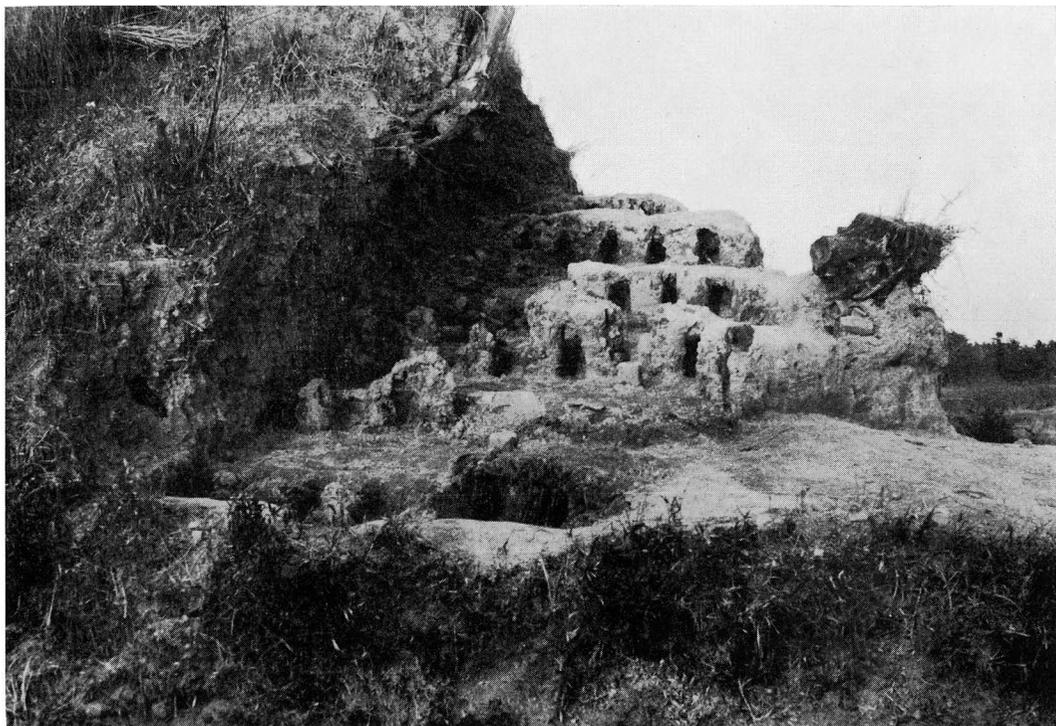
南釜谷古窯址の調査状況



木芯を示す炭化物（根掘りの右側）



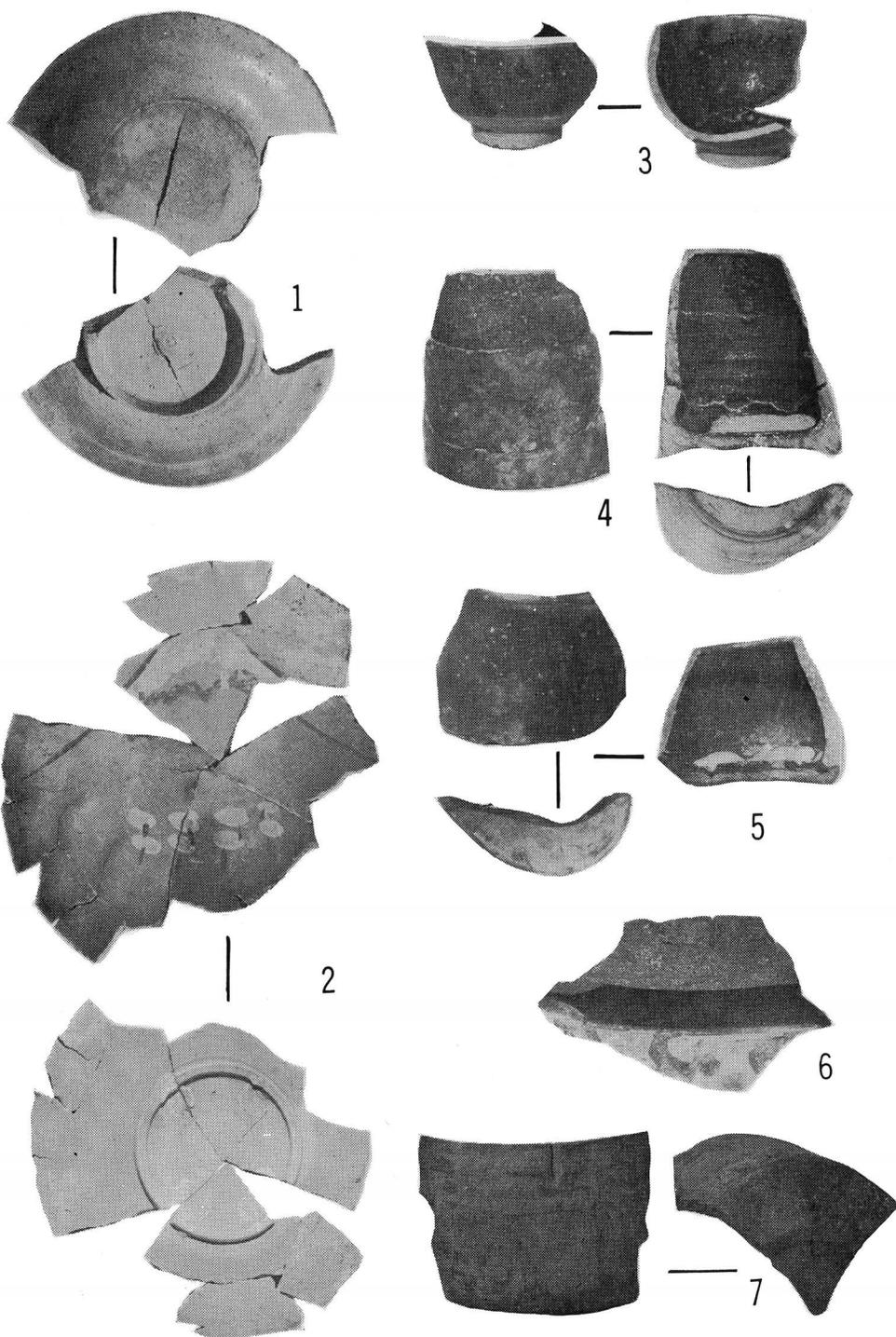
南釜谷古窯址遺構の俯かん



南釜谷古窯址全景

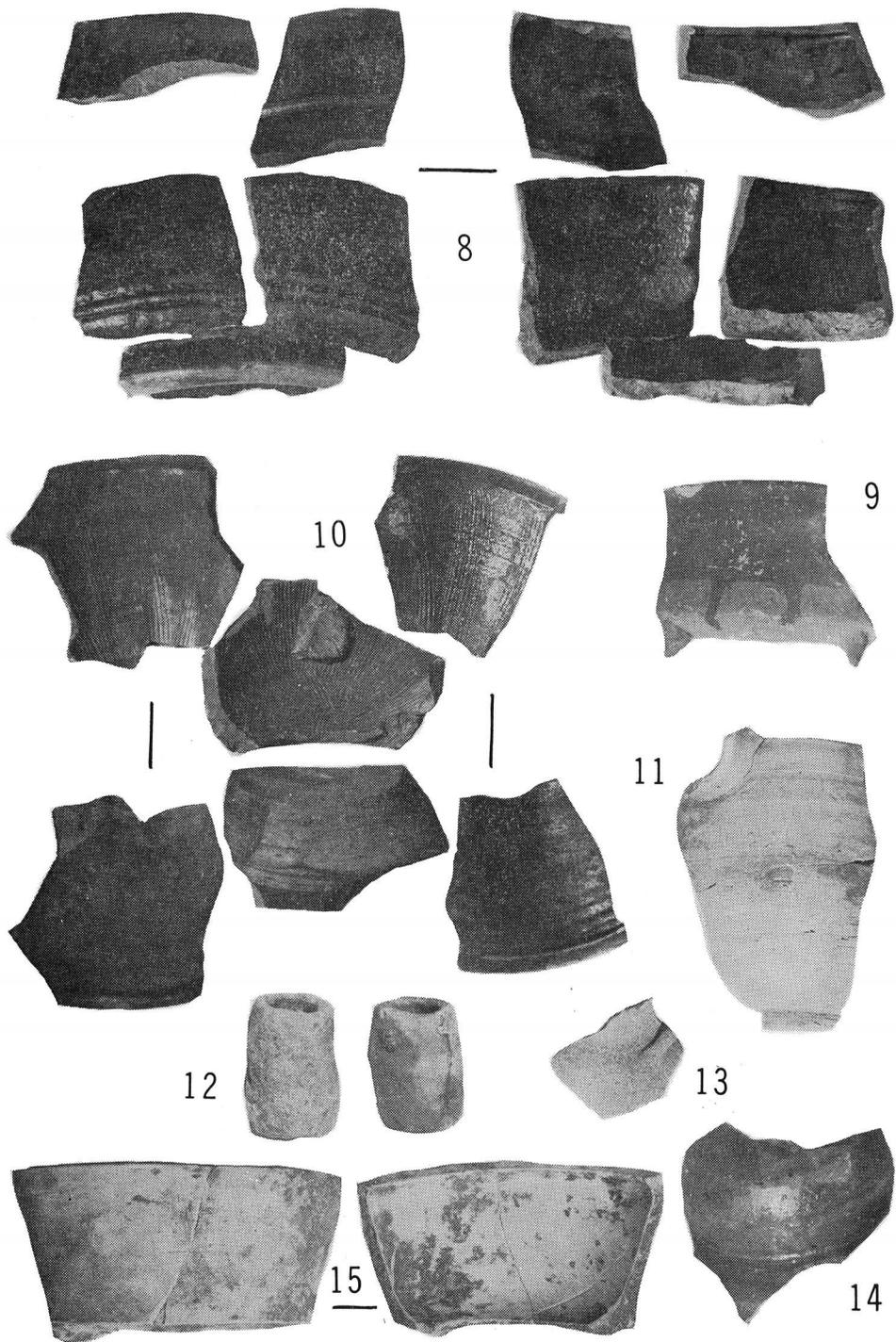


同上 煙道部より焼成室をみる — 狭間脚のむれ —



南釜谷古窯址の出土遺物 (1)

1. 灰釉皿 2. 絵付皿 3. 小天目 4・5. 蓋置 6. 茶釜 7. こぼし



南釜谷古窯址の出土遺物 (2)

8. タライ 9. 香炉 10. 擂鉢 11. 片口 12. 陶錘 13. 油さし 14. ひさご形小壺 15. 洗

昭和46年4月1日 印刷
昭和46年4月15日 発行

〔非売品〕

群 址 窯 古 ぜ 沙 昆

編集者 常滑市字鯉江新開476番地
発行所 常滑市教育委員会
印刷所 半田市板山町14の65
ツ ジ 印 刷 所

